

平成30年度

学校防災ボランティア事業 活動報告書



平成30年8月6日(月)～8日(水)

三重県教育委員会
マスコットキャラクター

みえびい



もくじ

1	はじめに	1
2	活動の概要	2
3	取組成果	11
4	参加者一覧	13
5	参加者のレポート	16

1 はじめに

災害大国日本では今年6月、大阪北部地震で登校途中の児童が倒壊したブロック塀に挟まれて亡くなるという痛ましい事故がありました。また、9月の北海道胆振東部地震では広い範囲で土砂崩れが発生し、液状化現象による被害や、ブラックアウトという大規模停電が起きました。7月の豪雨では日本の広い範囲で甚大な被害が発生し、その後も大型台風が幾度も日本を襲い、特に台風第21号では、三重県のすべての小中学校が休校になったほか、県内各地で施設被害や大規模停電が発生し、さまざまな被害を受けています。

三重県では、近い将来発生が危惧される南海トラフ地震や内陸直下型地震に加え、近年、甚大な被害をもたらす大型台風や頻発する局地的大雨等による自然災害から児童生徒の命を守るため、学校における防災教育と防災対策の充実が求められています。

さて、東日本大震災から7年半が経過し、被災地ではハード面の復興は進んでいるものの、震災後のトラウマに苦しんでいる方も多く、また、放射線の影響でいまだふるさとに帰れない方も多数おられるなど、復興は道半ばと言わざるをえません。

三重県教育委員会では、現地の方がどのような被災体験をされ、どのように復興に取り組まれているのかを学習することで、大規模な自然災害発生時に地域で自ら行動できる防災人材に育成することを目的に「学校防災ボランティア事業」に取り組んでおり、県内中高生37名が平成30年8月に宮城県や福島県の東日本大震災の被災地を訪問しました。

台風の影響で日程を1日縮めることを余儀なくされましたが、中高生は、自身の目で現地を見て、現地の人から直接話を聞いて、たくさんのことを学び、多くのことを感じてきました。参加者の多くが防災士の資格を取得し、それぞれの学校や地域で取組成果を発表し、防災意識の啓発、向上に努めるなど、今回の学習を通じて、中高生による被災地支援の意義・重要性を学び取り、地域の防災を担う人材として大きく成長してきました。

学校防災ボランティア事業の成果をここにまとめましたので、それぞれの教育委員会や学校において防災教育・防災対策の推進にあたり参考にしていただけたら幸いです。

この事業を実施するにあたり、「四日市東日本大震災支援の会」を主宰する四日市大学総合政策学部鬼頭浩文教授のコーディネートにより、充実した内容の事業となりましたことに感謝申し上げます。また、中高生をサポートしてくれた四日市大学、四日市看護医療大学の学生の皆さん、引率の先生、そして我々を受け入れてくださった東松島市あおい地区の小野竹一自治会長をはじめとした自治会のみなさん、お世話になった多くの方々に深く感謝の意を表します。

平成30年12月

三重県教育委員会事務局
学校防災推進監 明石 須美子

2 活動の概要

(1) 趣旨

近い将来南海トラフ地震の発生が危惧される三重県では、県内の中高生が自らの命を守り抜くことに加え支援者となる視点から、安全で安心な社会づくりに貢献できる知識や能力を習得することが求められています。

そこで、県内の中高生を宮城県や福島県の被災地に派遣し、現地の方々との交流や心のケア等を含めたボランティア活動、病院での被災体験学習や現地中高生との防災合同学習を行うことなどにより、大規模な自然災害発生時に地域で自ら行動できる防災人材の育成に取り組みます。

また、被災地でのボランティア活動経験がある県内大学生の参加協力を得て、中・高・大による縦割班活動を通じて集団のルールを学び、協調性や社会性を育てます。

さらに、参加した中高生が防災士の資格が取得できるように支援を行います。

(2) 期間

平成30年8月6日（月）から8月8日（水）まで2泊3日

（当初は9日（木）までの予定であったが、台風のため8日（水）までに短縮）

(3) 訪問先

宮城県 東松島市、石巻市

福島県 双葉郡富岡町

(4) 参加者

高等学校（25名；16校、男8名、女17名）

（国立1名、県立22名、私立2名）

中学校（12名；11校、男4名、女8名）

（国立1名、市立8名、町立2名、私立1名）

参加生徒 計37名

引率者（6名 大学教授1名、公立学校教諭3名（高校教諭1名、養護教諭1名、
中学教諭1名）、県教育委員会事務局2名）

大型バス乗車 計43名

協力者（21名 四日市大学8名、四日市看護医療大学13名）

うち中高生のサポーター14名（メイン7名、サブ7名）

マイクロバス乗車 計21名

総合計 64名

(5) 学習会

①事前学習会 7月15日（日）三重県吉田山会館

近年の自然災害、地震のしくみ、ハザードマップ、風水害と消防団

②現地学習会 8月6日（月）から8日（水）まで 宮城県、福島県

主な行程は次ページ参照

③事後学習会 8月25日（土）四日市大学

普通救命講習、防災士試験（希望者のみ）

8月26日（日）三重県庁

参加報告書の作成、知事への報告会

【現地学習会の主な行程】

8月6日（月）

- ・三重県伊勢庁舎 → 三重県庁 → 四日市大学 でバスに乗車
- ・三重県から宮城県に向けて出発
バス車内で自己紹介、事業への意気込み
東日本大震災関連のビデオによる学習（大川小学校、野蒜地域、福島県）
- ・高速道路サービスエリアで昼食・夕食
- ・東松島市銭湯元気の湯
- ・東松島市あおい地区集会所着
三丁目（女子）・一丁目（男子） 寝袋等で就寝体験

8月7日（火）

- ・旧大川小学校視察
講話「津波のしくみと被害」
語り部 大川伝承の会 佐藤 敏郎 氏
- ・道の駅 上品の郷 休憩・振り返り・土産購入
(バスの中で昼食)
- ・合同防災学習会
中学生と高校生は下記のとおり別行動

【中学生】東松島市矢本第二中学校にて

三重県（白鳥中学校）・女川中学校・矢本第二中学校
防災取組発表
5つの班に分かれて意見交換、各班から意見発表
「花は咲く」の合唱、記念撮影

【高校生】あおい地区集会所にて

地元高校生と高校生防災ワークショップ
講演「三重県における高校生・大学生が
防災・復興に貢献する仕組みづくり」
四日市大学4年 鈴木 昂樹 氏
避難所運営ゲーム

- ・夕食交流会（バーベキュー交流会）あおい地区集会所にて
講話「僕たちが伝えていくべきこと」
東松島市役所 商工観光課 主事 伊藤 健人 氏
講話「避難所運営と仮設住宅の暮らし」
東松島市あおい地区会 会長 小野 竹一 氏
東北大学特任教授 齋藤 幸男 氏
語り部 雁部 那由多 氏

8月8日(水)

- ・東松島市あおい地区出発
- ・福島県富岡町視察
福島県常磐富岡 I C の富岡 I C 駐車場(福島県双葉郡富岡町内)
から語り部がバスに同乗し、富岡町内の被災地視察(1時間)
語り部 富岡町3・11を語る会 仲山 弘子 氏
- ・福島県常磐富岡 I C から三重県へ出発
- ・バス車内での振り返り
- ・四日市大学(荷物下ろし、大学生降車)
→ 三重県庁 → 三重県伊勢庁舎で降車

(5) 主な活動内容

I 事前学習会（7月15日）

8月に東北を訪問する前に、あらかじめ、地震や津波、台風などの自然災害、また防災のさまざまなことについて学習しました。

全ての参加者が防災士教本を購入し、防災士資格取得カリキュラムに基づいて、保護者同伴のもと本格的な防災学習を行いました。

また、東北での現地学習会の行程と活動内容等の確認を行いました。



四日市大学の鬼頭先生からは四日市大学生を中心に構成する「四日市東日本大震災支援の会」のこれまでの宮城県・福島県の被災地支援の活動が紹介されました。被災地での支援活動と交流は、三重の地域防災に対する貢献に発展してきました。また、「近年の自然災害に学ぶ」と題して、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震のほか、全国各地で起きた災害で経験したさまざまな課題・問題にどう対応していくかお話いただきました。

自衛隊の方からは、地震や津波などの災害がどのような仕組みで発生するかを説明していただきました。また、実際に被災地で救助・支援に取り組まれた体験談を紹介しながら、少しでも被害を少なくするために日ごろから何をどのように備えておくか、また、避難所生活のために何をすればよいかなどを詳しく教えていただきました。



三重県防災対策部の防災啓発指導員の方からはハザードマップについて説明していただき、災害に対する危機意識が高まりました。また、住民の安全と安心を守る消防団の活動内容についても説明していただきました。そして、被災地でのボランティア活動の際に現地の方とトラブルになった例などを挙げて、ボランティアとして注意すべき点を教えてもらいました。

中高生は7つの班に分かれて、大学生のサポートのもと、自己紹介をしたり、参加目的等を発表したりしました。わずかな時間でしたがあらかじめ顔合わせを行ったことでお互いに打ち解け合うことができ、知らない人と一緒に東北へ行くことに対しての不安がやわらぎました。



Ⅱ 現地学習会

【第1日目（8月6日）】

上天気の中、全員、元気に東北に向けて出発しました。しかし、現地の東北は台風の接近が予想されており、不安な旅立ちとなりました。

バス中での防災学習

宮城県までのバス移動中、自己紹介と目標を発表した後、バスの中の防災学習として、現地の訪問先である旧大川小学校、野蒜地区、福島県の子どもたちなどを特集したビデオを見ました。

これから視察、見学する地域、場所について予備知識を身につけました。



あおい地区集会所

夜10時、活動の拠点となる東松島市に到着しました。現地の方のあたたかい配慮で、集会所に宿泊させていただきました。避難所生活の体験という意味合いで、寝袋で寝る体験をしました。マットは敷かせてもらったものの、堅い床の上で寝ました。何日もこのような状態が続くと、大変だろうなと実感しました。



仲間達との宿泊は、楽しいものでしたが、実際に避難することになったら寝袋も人数分はないだろうし、まず家族の安否とか食料・トイレ・衛生など不安で眠れないんだろうなと想像しました

【第2日目（8月7日）】

旧大川小学校視察（大川伝承の会 佐藤敏郎氏）

児童74名と教職員10名が犠牲になった旧大川小学校を訪問しました。



震災当時女川中学校の教師で、大川小学校の6年生だった娘を亡くした佐藤 敏郎さんの話を聞かせてもらいました。

「救えた命、救いたかった命、救ってほしかった命、いざというときの判断と行動が大切。」と佐藤さんはおっしゃいました。「集団で命を救うためには、力を合わせて判断と行動をとる。それが防災だ。」と佐藤さんから教えられました。

合同防災学習会

(中学生の行動)

東松島市立矢本第二中学校にて



三重県の中学生12人は、東松島市立矢本第二中学校で、第二中学校の10人、東女川町立女川中学校の13人の25人合同で防災学習を行いました。

三重県からは鈴鹿市立白鳥中学校の秦さんが自校や鈴鹿市及び三重県の防災の取組について、女川中学校、矢本第二中学校からも学校

やまちの防災取組についてそれぞれ発表し合いました。

その後、5つの班に分かれて課題について議論し合い、「ハザードマップはあくまで予想なので、過信をしてはいけない。」「家族で相談して避難する場所を決めておくことが必要。」など、話し合った内容を発表しました。

最後に、全員で「花は咲く」を合唱しました。



(高校生の行動)

あおい地区集会所にて

高校生は、あおい地区集会所で、地元の高校生と一緒に防災の合同学習に取り組みました。

震災当時石巻市の中学生で、現在四日市大学4年生の鈴木昂樹さんから避難所で困ったことや大変だったことを聞きました。

その後、避難所運営ゲーム（HUG）に取り組み、学校を避難所と設定し避難してきた人の配置や要求の対処について考えました。瞬時の判断が重要でした。



夕食交流会

その後、地域の方とバーベキューで交流を楽しみました。

一丁目の集会所で、あおい地区住宅の方々と夕食を食べながら交流の場を持ちました。

バーベキューの準備をしているときから、あおい地区の皆さんが積極的に話しかけてくださって、初めて会ったとは思えないほど話がはずみ、壁を感じませんでした。

特に、宮城県と三重県の方言の違いについて話し合っただけで盛り上がりました。



講話「避難所運営と仮設住宅の暮らし」（あおい地区会長 小野竹一氏）

小野さんから、被災体験、そして、被災体験をばねにして、日本一住みやすいまちづくりに取り組んでいることなどを話していただきました。

あおい地区の人たちは、全国から視察や交流に訪れるさまざまな団体を積極的に受け入れられています。三重県から来た私たちも、温かく受け入れてくださいました。

小野さんは、つらかった体験も、やさしい口調で語ってくれ、皆、静かに話を聞いていました。

「被災地に来てくれること自体がボランティア」という言葉がとても印象に残りました。



講話「僕たちが伝えていくべきこと」（伊藤健人氏）

家族のうち4人を震災で亡くした伊藤さんは、一番下の弟が好きだった青色の鯉のぼりを、弟のためにあげていました。その後、亡くなった子どもたちみんなのために、全国から青い鯉のぼりを集めて、地震や津波の心配のない大空に青いこいのぼりをあげる「青い鯉のぼりプロジェクト」に取り組んでいます。



伊藤さんからは「心を前に向けて行けるように、いろいろな人とつながっていくことが大切。」だと教えてもらいました。

講話「避難所運営と仮設住宅の暮らし」地元高校生と合同学習

(東北大学特任教授 齋藤幸男氏、16歳の語り部 雁部那由多氏)



齋藤先生は震災当時、石巻西高校の教頭先生で、大変な思いで避難所運営にあたっていました。「子どもの姿が被災した方を明るくする。だから子どもたちが動くことはとても大事」と言ってくださいました。

震災当時小学5年生だった雁部 那由多さんは、3月に高校を卒業したばかりです。「未災地」とは「未だ災害が起きていない地域」という意味です。言い換えると「未来におい

て災害が起きる地域」という意味でもあります。経験したことをあとの世代に残すこと。思い出し続けること。心の中に持ち続けること。これが次の災害に備えることにつながる。地元に興味を持つことから、おのずと防災意識は高まる、と力強く教えてくださいました。「思い出をつくること、郷土を愛すること」の大切さを教えてくださいました。



【第3日目（8月8日）】

福島県富岡町視察

語り部の仲山弘子さんに案内をしてもらいました。

東日本大震災から7年半が経とうとしていますが、未だに帰還困難区域があり、バリケードが設置されており、住民は月に2回しか入れません。ところどころに検問所があり、警備員が立っています。



仲山さんは、7年間放置されたため変わり果ててしまったまちの様子を、悲しい気持ちを抑えながら、穏やかな口調で、ていねいに説明してくれました。

全国的に有名な富岡町の桜並木の8割は帰還困難区域の中にあります。仲山さんは「みなさんに満開の桜を楽しんでもらえる日が来ることを待っている」とおっしゃっていました。

バス車内での振り返り



帰路はバス車内で、中高生による被災地支援、若者のボランティア活動等についてのビデオ学習をしました。

また、今回の3日間の学習項目ごとに、班別に振り返りを行いました。この3日間で、見たこと、聞いたこと、体験したこと、学んだこと、心に残ったことなどを意見交換しました。

わずか3日間の行程でしたが、みなさんの意識が大きく変わった非常に意義の深い3日間でした。

Ⅲ 事後学習会

普通救命講習（8月25日）

四日市消防本部、四日市大学機能別消防団に所属している四日市大学生、四日市看護医療大学生の協力を得て、防災士試験受験に必要な普通救命講習を受けました。普通救命講習は3時間の講習で、人工呼吸や心臓マッサージなど基本的な救命技術を身につけました。

すでに、学校でAEDの使い方を習ったという参加者も多く、受講は要領よく進みました。



防災士試験（8月25日）



希望者のみですが、一般社会人の方と一緒に受験しました。

学校防災ボランティア事業参加者の多くが意欲的に取り組み、この日の受験者から15名が防災士試験に合格しました。

パワーポイントで発表資料を作る振り返り学習（8月26日）

東北でのボランティア活動の思いや記録を共有しながら、これまでの活動を振り返って、各学校の集会や文化祭、市町等で報告会を行うための発表資料作りを行いました。

7つの班で分担して、パワーポイント資料にまとめました。2～3時間の短い準備時間でしたが、どの班もきちんと資料をまとめて、うまく発表していました。

なお、途中、鈴木知事が激励に訪れてくださ



いきました。知事から何人かが指名されて、今回の活動で学んだこと、感じたこと、これから、どのように防災に取り組んでいくかなどを語りました。

3 取組成果

(成果)

・学校防災ボランティア事業の参加者らは、アンケート結果や感想文などから、中高生による防災ボランティア活動・被災地支援の意義・重要性が理解できたことがうかがえます。

・学校防災ボランティア事業に参加した中高生に対し、防災士の資格を取得できるよう支援して、地域で自ら行動できる防災人材として育成しています。

(合格者：15人 平成28年度からの累計63人)

・学校防災ボランティア事業に参加した生徒1名が9月14日(金)から16日(日)にかけて、鬼頭先生が事務局を務める「四日市東日本大震災支援の会」が主催する熊本県西原村でのボランティア活動に参加しました。

西原村の仮設住宅でのサロン活動として、熊本地震被災者の方に足浴とお茶会のボランティア活動で、あたたかい交流を行ってきました。

・参加生徒の学校に対して、全校集会や文化祭、始業式や終業式、地域などで発表する機会を確保するよう依頼してきました。参加者らが学校等で活動内容を報告することにより、学校全体で防災意識の向上に取り組まれています。

(8月30日桑名西高校全校集会での発表 ほか)



・市町教育委員会に対して、参加中高生に取組成果を地域で発表する機会が与えられるよう依頼し、生徒が地域の防災活動に参加するきっかけを創出しています。

(9月15日芸濃地区防災訓練での発表 ほか)

・三重県教育委員会では、三重県総合文化センターで開催された高校生フェスティバルの中の高校生フォーラムや、2月に開催予定の中高生防災サミットで発表することにより、成果を県全体に広めることに努めています。(11月3日高校生フォーラム、2月10日中高生防災サミット(予定))

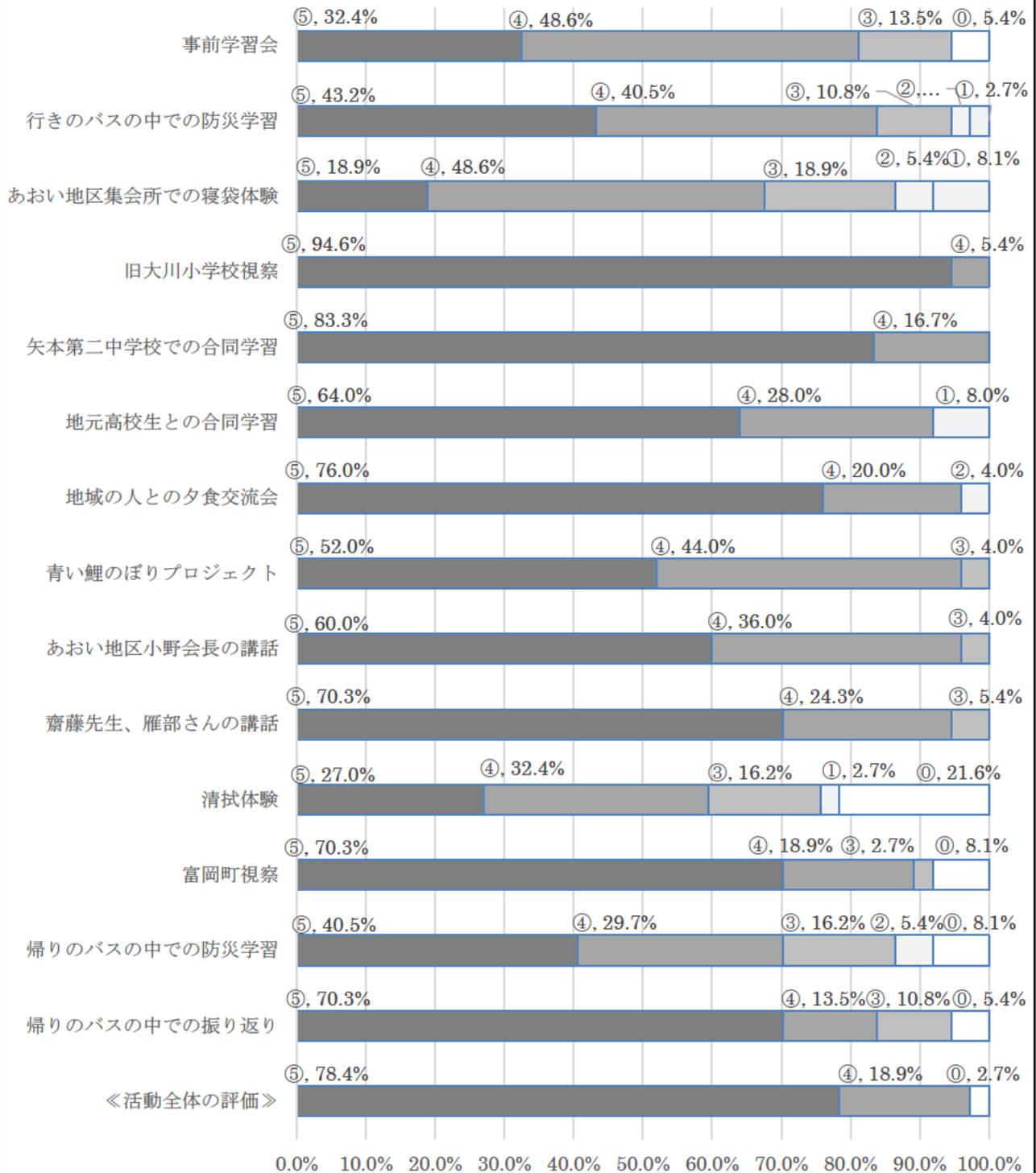
(課題)

・より多くの学校で防災意識の向上を図るために、参加者を県内から幅広く集めることが必要です。

・より多くの人に事業の成果を伝えるため、学校防災ボランティア事業で学んだことを発表する場をできる限り多く確保することが必要です。

・参加中高生が、その後も、地域を担う若き防災人材として活躍できるよう支援していくことが必要です。

学校防災ボランティア事業参加者アンケート



⑤大変ためになった ④ためになった ③普通 ②あまりためにならなかった ①ためにならなかった ①無回答

4 参加者一覧

(1) 全体名簿

	学校種等	設置者	所在地	学校名等	学年	性別	班
1	高校	県	桑名市	桑名西高校	1	男	6
2	高校	県	桑名市	桑名西高校	1	女	5
3	高校	県	桑名市	桑名西高校	1	女	3
4	高校	県	川越町	川越高校	2	男	7
5	高校	県	川越町	川越高校	1	女	3
6	高校	県	四日市市	四日市南高校	2	男	5
7	高校	私	四日市市	暁高校	1	女	2
8	高校	私	四日市市	四日市メリノール学院高校	1	男	1
9	高校	県	鈴鹿市	白子高校	3	女	1
10	高校	県	鈴鹿市	白子高校	3	女	2
11	高校	県	鈴鹿市	白子高校	1	女	4
12	高校	国	鈴鹿市	鈴鹿工業高等専門学校	1	男	2
13	高校	県	津市	津西高校	1	女	7
14	高校	県	津市	津西高校	1	女	6
15	高校	県	松阪市	松阪商業高校	3	女	4
16	高校	県	伊勢市	宇治山田高校	2	女	1
17	高校	県	伊勢市	宇治山田商業高校	3	女	3
18	高校	県	伊勢市	宇治山田商業高校	3	女	5
19	高校	県	南伊勢町	南伊勢高校南勢校舎	1	男	1
20	高校	県	度会町	南伊勢高校度会校舎	1	男	4
21	高校	県	度会町	南伊勢高校度会校舎	1	男	6
22	高校	県	鳥羽市	鳥羽高校	2	女	7
23	高校	県	名張市	名張高校	2	女	2
24	高校	県	名張市	名張高校	2	女	6
25	高校	県	熊野市	木本高校	1	女	4
26	中学校	町	東員町	東員第二中学校	3	女	3
27	中学校	市	四日市市	大池中学校	1	男	5
28	中学校	市	四日市市	大池中学校	1	男	7
29	中学校	私	四日市市	暁中学校	3	女	6
30	中学校	町	朝日町	朝日中学校	2	女	7
31	中学校	市	鈴鹿市	白鳥中学校	3	女	5
32	中学校	市	亀山市	関中学校	2	女	2
33	中学校	市	津市	豊里中学校	2	男	3
34	中学校	国	津市	三重大学附属中学校	1	女	1
35	中学校	市	伊勢市	豊浜中学校	3	女	4
36	中学校	市	伊勢市	北浜中学校	1	男	2
37	中学校	市	志摩市	磯部中学校	2	女	1

	学校種等	設置者	所在地	学校名等	学年	性別	班
38	引率	県	鈴鹿市	白子高校	教諭	女	
39	引率	県	津市	聾学校	養護教諭	女	
40	引率	市	鈴鹿市	白鳥中学校	教諭	女	
41	引率	私	四日市市	四日市大学	教授	男	
42	引率	県	津市	三重県教育委員会事務局	主幹	男	
43	引率	県	津市	三重県教育委員会事務局	主幹	男	
44	大学	私	四日市市	四日市大学	4	男	4
45	大学	私	四日市市	四日市大学	3	男	1
46	大学	私	四日市市	四日市大学	3	男	2
47	大学	私	四日市市	四日市大学	2	女	3
48	大学	私	四日市市	四日市大学	2	女	4
49	大学	私	四日市市	四日市大学	2	男	5
50	大学	私	四日市市	四日市大学	1	男	6
51	大学	私	四日市市	四日市大学	1	男	7
52	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	2	女	7
53	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	男	
54	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	女	
55	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	女	
56	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	2	女	3
57	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	女	
58	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	2	女	5
59	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	1	女	1
60	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	1	女	6
61	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	1	女	2
62	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	女	
63	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	女	
64	大学	私	四日市市	四日市看護医療大学	3	女	

(2) 活動班

	学校・学年
1 班	白子高3年生、宇治山田高2年生、メリノール学院高1年生 南伊勢高南勢1年生、磯部中2年生、附属中1年生 サポーター ・メイン 四日市大3年生 ・サブ 四日市看護医療大1年生
2 班	白子高3年生、名張高2年生、暁高1年生 鈴鹿工専1年生、関中2年生、北浜中1年生 サポーター ・メイン 四日市大3年生 ・サブ 四日市看護医療大1年生
3 班	宇治山田商高3年生、桑名西高1年生、川越高1年生 東員第二中3年生、豊里中2年生 サポーター ・メイン 四日市大2年生 ・サブ 四日市看護医療大2年生
4 班	松阪商高3年生、白子高1年生、南伊勢高度会1年生 木本高1年生、豊浜中3年生 サポーター ・メイン 四日市大2年生 ・サブ 四日市大4年生
5 班	宇治山田商高3年生、四日市南高2年生、桑名西高1年生 白鳥中3年生、大池中1年生 サポーター ・メイン 四日市大2年生 ・サブ 四日市看護医療大2年生
6 班	名張高2年生、桑名西高1年生、津西高1年生 南伊勢高度会1年生、暁中3年生 サポーター ・メイン 四日市大1年生 ・サブ 四日市看護医療大1年生
7 班	川越高2年生、鳥羽高2年生、津西高1年生 朝日中2年生、大池中1年生 サポーター ・メイン 四日市大1年生 ・サブ 四日市看護医療大2年生

5 参加者のレポート

(高校生)

桑名西高校 1年 ****

今回僕は、このボランティア活動に参加して、今まで自分たちが目にするのでできなかった被災地の現状を知ることができた気がしました。東日本大震災が起こった当時、僕は小学2年生でした。学校では、少しゆれを感じる程度で、その時はあまりそのゆれのことは気にもとめていませんでしたが、家に帰ると、どのチャンネルにきりかえても、地震のことでもちきりになっていたのを覚えています。被災地に行く前は、さすがに7年



もたっているから、ある程度復興も進んでいるんだろうなと思っていました。でも、実際に被災地を見て、復興は進んではいるものの、まだまだ被災した当時のままだが残っていて、熊本の地震も、西日本豪雨の被災地も、復興は進んではいるものの、被災した当時のままだが残っていくのだと思います。被災した現地の人のお話を聞いたことで、被災した人たちの当時の行動や心情、復興に対して抱く心情を知ることができました。そして辛い思い出も人に語り伝えることで、自分の中にある辛い思いが、段々と伝えるべき思い出にかわっていくのだなと感じました。



桑名西高校 1年 ****

私は今回初めてこのボランティア事業に参加しました。1日台風の影響でなくなってしまったけど、濃い1日1日を過ごすことができました。まず、最初に感じたのは7年という長いと感じていたけど、意外に短いんだなということです。もちろん、震災当時よりはかなり復興してきてはいるけど、まだまだなんだなって思いました。旧大川小学校を訪れたとき、小学校と校門のみが残ったと聞いて、津波の恐ろしさをあらためて知りました。佐藤さんも言っていたように、



「特別じゃないときに特別じゃない日に災害は起こる。」まさにそうだと思います。だからこそ、常に備えておかなければいけないと思いました。また、高校生の交流会では、話を聞いて三重と宮城は県の形が似ているということを知って同じようなことを二度起こすことは絶対にしてはいけないと思いました。避難所運営ゲームでは、誰が来るか分からなくて後からそこに入れるべきだったと考えてしまうことも多かったので、早く判断しつつも一人一人にあう場所を考えることができるようにしたいです。もし、起こった時は、自分たちで運営していくことになるので、とてもいい体験をすることができました。たくさんの講話を聞

かせていただいて、話をしてくれている人たちはつらい経験をしているのにもかかわらず、私たちに震災のことを伝えようと話してくださって本当に感謝の思いでいっぱいです。たった1メートルぐらしか離れていなかったのに助からなかったという地震や津波のこわさを学びました。そして、ハザードマップが絶対100%役立つとは限らないことを知りました。もちろん、ハザードマップは大切だけど、想定外のことももちろん起こります。信じすぎることはないようにしたいです。今からでも、できること、1日一つ大切な思い出を作りたいです。どんなことでも、どんな時でも思い出を1日一つ以上作れるようにしていきたいと思いました。

桑名西高校 1年 ****

私が、このボランティアに参加してまず思ったことは参加してよかったと思うことです。私はこのボランティアに最初は参加するつもりはありませんでした。友達に誘われて参加が決まっても正直防災については知らないことだらけだったし、興味がありませんでした。でも、実際に行ってみると、実際に行ってみないとわからない感情がありました。中でも私が一番心に残っているお話は大川小学校であった出来事についてです。最初、小学校を見たときこれがほんとに学校か目を疑いました。でも、黒板を見たとき「ああ、ほんとに学校なのだな」と思いました。佐藤さんから聞いたお話は衝撃の連続で涙が出てしまいそうになる場面もありました。今でも、大川小の先生がどんな気持ちで津波の方に逃げることを決め、児童たちがどんな気持ちで狭いフェンスをくぐり抜け前からやってくる津波を見たときどう思ったのか考えるだけで涙が出そうになります。あの時大川小の児童、先生は結果的に津波へ向かって1分間行進するだけになりました。でもそれは誰もが生きたいと願った1分間だったのだと思います。あの時救えなかった命は救いたかった命であり救えた命でこのような悲劇はなるべく、できるだけではなく二度と起こしてはいけないと佐藤さんは語ってくれました。この大川小のお話を聞いた後は、今までに感じたことのない気持ちになりました。その時、自分はまだ東日本大震災のことをどこか他人事に感じ



ていたのだと気づきました。7年前の3月11日。私はたったの小学校2年生でした。でも、実際にはあの時私と同年もしくはそれより小さな子が大人と同じ恐怖を味わいどれだけ怖い思いをしたのかを考えると、もう他人事には思えません。私が今一番思うことはもっとたくさんの方が実際に被災地を訪れるべきだということです。あそこには私たちが知るべき事実や感じなければいけない感情がたくさん残っています。

川越高校 2年 ****



私は、今回初めてこの学校防災ボランティア事業に参加させていただきました。私が今回、このボランティア事業に参加しようと思いついたきっかけは、地震の多い日本に生まれ、今後起こると危惧されている南海トラフ地震への備えについて学ぶ必要があると思ったからです。最初にこのボランティア事業のパンフレットを見たときは、興味本位で行ってみたいと思っただけでしたが、「防災」について考える良い機会だと思い、参加を決意しました。ただ、ボランティア活動に参加すること自体が初めてであり、知り合いが一人もいない中で活動するのはとても不安でした。その不安も、引率の大学生の方や班の人たちとの交流の中で少しずつ消えていきました。今回のこの活動では、そのような人との交流を通じて、コミュニケーションの大切さを学びました。現地では、地元の高校生と「HUG」というゲームを通して親睦を深めたり、集会所の皆さんとBBQの用意をしたりと、たくさんの人と交流する場面がありました。集会所の皆さんはとても優しく、たまに方言なども交えながらたくさんのお話をしました。集会所は笑顔でいっぱいでした。しかし東日本大震災が残した大きな傷跡は、7年経っても癒えることなく残っていました。今でも震災当時のことが頭をよぎったりするそうです。私は、語り部の方のそのような話を聞いて想像すると、胸が痛くなりました。一度も大きな災害を体験してない私は、次にいつ起こるか分からない災害に備えるために、しっかり防災について学習し、災害時にこの経験を活かして行動できるように準備していきたいと思いました。

川越高校 1年 ****



私は東日本大震災から7年たった被災地の現状や課題を実際に現地に行って学びたいと思い、この学校防災ボランティアに参加させていただきました。私が特に印象に残ったのは旧大川小学校での佐藤さんの話です。剥き出しの教室や剥がれた天井にはやはり衝撃的でしたが、それよりも屋外ステージの壁画を見たり、佐藤さんに震災が来る前の大川小の話を聞くなかで、ここも震災前は私が通った小学校と同じように子どもたちが楽しく学び遊んだ場所なんだと実感し、とても胸が痛くなりました。「特別じゃない場所、時に災害が来る」ということがあらためて分かりました。「あの日親が救えなかった命、先生たちが救えなかった命は間違いなく救えた命だった」という言葉が印象的でした。津波発生までの50分間、小学生の子どもたちが校庭で「死ぬ」ことを考えた時間で何をすべきだったのか、どんな気持ちで子どもたちは、先生は最後の1分間を逃げたのか、沢山のことを考えさせられたし、学校に通う生徒の一人としても、二度



とこんな悲しいことが起きないように学ばなければならないと思いました。

他にも沢山の方に震災の話を語っていただきました。そこから学ぶだけで終わらず、一人でも多くの人に防災について興味を持ってもらえるように学んできたことを伝えていきたいです。また、この機会をとおして、「防災」という面においても人とのつながりが重要だということが分かったので、自分の住む地域のつながりを大切にしていこうと思います。

四日市南高校 2年 ****

自分が、今回の学校防災ボランティア事業で感じたこと、それは、被災者のことを 100 パーセントの感情で、周りの人に伝えていくのは、不可能であるということです。当たり前と言われればそうなのかもしれませんが、自分が3日間で感じたことは素直にこれだと思います。今回は、実際に被害にあわれた方に多くの話を聞くことができました。しかし、自分は、話の内容よりも、話し手の目線、口調、表情自体が、あの日のことを物語っ



ていると感じました。自分は、被災者の話をそのまま人に伝えることはできます。ただ、被災者の方と同じ感情で伝えることはできません。これにより分かったことが一つあります。それは、やはり、テレビなどのメディア媒体を通して得る情報の数倍のことを直接行ってみることで初めてわかることが数多くありました。震災による本当の悲しみ、そして震災によって得られた教訓、新たな絆、それらがほんの少しですが見れたような気がします。

また、今回東北に行って気付いたことがもう一つあります。それは、人の心情も復興をするということです。今までは、復興するのは街だけだと思っていましたが、人の心情も時間が経つにつれて、街が復興するにつれて、復興することに気付きました。旧大川小の語り部の方も富岡町の語り部の方もおそらく、あの日から何も心情の変化が無ければ、自分たちに話してはくれないでいただけなかったと思います。しかし、震災に対する見方が変化したからこ



そ、次の災害への教訓として語っていただきました。自分も、その想いに応えられるよう、もっとあの日のことについて知ろうと思いました。

最後に、自分がずっと疑問だった「街の防災力を高めるためには？」という質問にこう答えていただきました。「自分の街の郷土愛を大切にすること。」この答えは、今回の事業で一番の収穫です。まずは、自分の街を好きになること。そこから変わりたいと思います。

暁高校 1年 ****

残念ながら、台風の影響で4日間のところを3日間に短縮されてしまったこの行事ですが、それでも3日間で多くのことを学びました。バス中でのビデオでの学習、旧大川小学校での語り部さんの話、大きな被害の出た東松島市のあおい地区での交流会やそこでの講話、そして原発事故で被災した富岡町や双葉町の視察、そこでの語り部さんの話。被災地へ行き、被災された方の話を聞いたからこそ学べたこともありました。



一番印象に残ったのは、70人の小学生と教師の命が失われた旧大川小学校での話でした。逃げる場所も、時間もあつたのに判断を間違えたばかりに多くの犠牲が出てしまった大川小学校、当時の私と同じぐらいの歳の子供達が生死について考え、怯え、その後津波に吞まれてしまったということがとても衝撃的でした。判断次第で助かる命と助からない命があるということを実感しました。

目に見える被害としての津波の被害も甚大ですが、目に見えない放射能の被害にあつた富岡町での話も心に残りました。本来震災翌日から元の生活に戻れるはずだったのに、放射能のせいで7年間戻れなかった町。住民の方からしたらとても辛かったと思います。

私が今回見聞きしたのは、人の判断により命が失われてしまったり、防災無線の故障などで情報が届かず津波に吞まれたり、といった話が多かった気がします。そういったことを聞いて、自然災害の発生自体は防げなくても、自分や身近な人の死は備えや判断によって防げるかもしれないと感じました。例えば、私の家のすぐそばを川が通っているから、地震が来たら高い所に逃げる。登校中に被災した場合の避難の仕方を考えておく。こういったことをしようと強く思いました。そして、そう思えたのはこの行事に参加したからなので、とても有意義であつたと思います。

四日市メリノール学院高校 1年 ****



高い確率で発生するといわれている南海トラフ地震。これまで、ただ「怖い」としか感じてきませんでした。学校防災ボランティア事業を通じ、単に怖がるだけでなく「覚悟をもって決断する力」と「自然災害に備えた心構え」の必要性を強く感じるようになりました。特に私が今回のボランティア事業で印象に残っているのは、大川小学校で過ごした時間です。被災地に足を運んでみて、テレビ報道で観ていた時とは全く違う感覚に気付いたのです。そこには多くの児童が一瞬にして命を落としてしまった悲劇を、単なる天災で終わらせることができない背景を強く感じたからです。「裏山に逃げていれば・・・」訪れた大川小学校の裏山は、さほど傾斜はなく、小学生でも十分登れるように感じました。なぜ大川小学校だけが惨事となったのか？当時私たちと同じ年齢だった子ども達の未来が一瞬にして断たれてしまった事実。大人たちに油断と判断の誤りがあつたのだろうか？津波という自然に対しては不可抗力だったのだろうか？二度と同じ悲劇を繰り返さないためにも「何が起つたのか？」をしっかりと刻印しなければなら

ないと感じました。

あの日の午後2時46分。私も同じ小学生で「帰りの会」の最中でした。あれから7年。高校生になり、あの頃よりは広い視野を持てるようになった今、単に「東北を忘れない」のではなく、災害時に、いかに犠牲者を減らすことができるのか？自分には何ができるのか？と考えていきたいと思うようになりました。震災の教訓を伝えていくこと、地域交流を大切にしていくこと、そして、辛いことがあっても、前を向いていくことの大切さを学ぶことができ、より多くの人々に、この経験を伝えていきたいと思えます。



白子高校 3年 ****



私は今回初めて学校防災ボランティア事業に参加させていただきました。参加しようと思った理由は三重県には今後南海トラフ大地震が起これると予測されているからです。私はもう来年には社会人となっており、仕事に就いたときみんなを守らないといけない立場になるので、正しい知識を身につけ、この経験を活かしたいと思いました。

私は東日本大地震について2011年の発生時から今までニュースで見してきました。車や建物が濁流に流されていく映像が目に焼き付いています。参加するまでの私は、海岸近くの白子高校に通っているのに逃げ道や災害用品を準備していなかったのも、いざという時危険な状態でした。また、月日が経つにつれ周囲の防災に対する意識が薄れていっていると感じていました。この活動に参加させていただいたことで、意識が高められ三重県にいただけでは得られないものを学習することができました。実際に被災地に行き、感じたことは復興に向かっている場所もあるけど、あまり人がいなくて高齢化が進んでいるという印象でした。また、原発近くの避難区域をバスで通った時は7年前と変わらない建物や看板が並んでいる光景に言葉を失いました。その現実を見て、その地域の方々だけでなく私たちみんなでもっと盛り上げていかなくてはならないと感じました。それは難しいことではありません。名産品を購入したり、それを元に会話の話題にするだけで力になると思います。また、あおい地区の方たちと交流した時の地元の方の笑顔や元気さを見てとても嬉しかったことを覚えています。こういった積極的な交流の機会も、もっと増やせていけたらいいなと思いました。大川小学校を見学させていただいた時は、震災地はよく特別なものとされがちだけど私たちの町と何ら変わらないということが分かりました。震災前の光景と私たちの町を重ね合わせれば震災というものをより身近に感じることができるはずです。



白子高校 3年 ****

私が学校防災ボランティアに参加し思ったことは、現地の人の話を聞くということはとてもためになるなということです。大川小学校で佐藤さんの話を聞かせていただいて一番心に残ったお話は、地震が起きたから特別になっただけでももとは普通の場所、平凡な時間、平凡な場所で災害が起きるということです。今後三重県に大きな地震が来るといわれています。佐藤さんの話で私はいつ地震が来るかわからないし、どんな場所でどんな災害が来るかわからないので事前に備えておくべきだなと思いました。今までの災害についての考えは考え直さなければならぬなと思いました。自分がもつ災害の固定概念では、自分自身の命を守れないことを知りました。自分が通う白子高校ではとても海が近いので津波がくるといわれています。多分、学校防災ボランティアに参加をしていなかったら甘い考えでいたと思うし、自分が思っていた以上の津波が来ることを想定しなければと思いました。また、私は公務員を目指しています。公務員になれた場合、自分に何ができるかをあらためて考え直す必要があるなと思います。私は熊本県で生まれ、将来も熊本県でと思っています。今回この学校防災ボランティアに参加した後、熊本県に帰省して来ました。東北と違い津波での被害ではないのですが道が段になっていたり山肌が崩れていたりしており地震の影響がまだ残っている所が多かったです。祖父母は熊本市内で被災しました。まだ市内だったので被害は少なかったのですがそれでも断水し公園に水を取りに行っていたそうです。祖父母が住んでいる所は高齢者が多いので大変だと思います。今回のボランティアでどう解決するかを考える機会になりました。今回学んだことを自分の将来に活かし今後も防災のことについて考えようと思います。



白子高校 1年 ****



人や学校のみんなに前に進んでいることを知ってほしいです。そしてもっと防災について興味をもってほしいです。いつ起こるか分からないならいつきても対応できるようにしてほしいので、私からたくさんの人に発信していきたいです。

私は、今回初めてボランティアに参加させてもらいました。最初は何をしていいのかや何をするのか想像が付きませんでした。実際に現地に行って、目で見てお話を聞いていると映像よりも現実味があって、それと同時に心苦しいものがありました。ですが、現地の人たちは変わっていく被災地に複雑な気持ちがありながらも前に進んでいました。でもまだ多くの人たちは被災者=かわいそうになっていると思います。私はより多くの地域の



鈴鹿工業高等専門学校 1年 ****

今回、僕は初めて東北ボランティアに参加させていただきました。今までテレビでしか知ることができなかったこの話を聞いたり、現地に行ったりなどの色々な方法で知ることができました。その中で一番印象に残ったのは、大川小学校の教室に特別に入れていただいた時のことです。震災から7年が経過しているにもかかわらず、まだ爪痕がはっきりと生々しく残っていることに衝撃を受けました。僕は初めて大川小学校のようなものを見たので、あまりに衝撃を受け言葉が出ませんでした。とにかく鳥肌がすごかったです。



また、僕は今回語り部さんの話を聞くのは初めてでした。実際に震災を経験している語り部さんが話してくださった話は、とても大切なことばかりで、この方たちの想いをムダにしてはいけないと思いました。なので、聞いた話を自分の中にとどめておくのではなく、周りの人にそれを伝えて、震災時に経験した苦しい思いをする人をこれ以上増やさないようにしていきたいと思いました。三重県では、南海トラフ大地震の心配があるので、東日本大震災を教訓にし、今回聞いた話の中で自分が取り組みそうなものを取り組んでいきたいです。

僕が活動しているとき考えていたことがあります。バスの中から見た福島原発で汚染された土等が入っている黒い袋の多さ。ほかにも色々ありましたが、どれもが初めて見る光景でした。そして、避難指示は解除されているのに、人がいないことにびっくりしました。富岡町は、3.11 のまま、時間が止まっているような感じでした。建物は壊れたままで手が付けられないほど草やツタが巻き付いていました。僕たちは復興などと言っていますが、こんな状況を見て僕は怖くなりました。もし、自分が同じような状況になったとき、きちんと対応していけるかずっと考えていました。最後に、この3日間楽しく学習出来て本当に良い体験をしたなと思いました。

津西高校 1年 ****



私は中学生のころから防災に興味があり、中学校で行っていた活動でも防災について3年間学んできました。しかし、直接被災地に出向いたことは少なく、被災者の方の心情に特に興味がある私は震災が経って震災当時の経験を語っていただける方にお会いするのは初めてのことでした。人がトラウマになるような光景を、もう一度思い出して話すことは本当につらいことだと思います。しかし、私が質問したすべての方が私にその時の心情を

話してくれました。

私には想像ができないことだらけでした。そもそも、私が小学2年生のときに東日本大震災が発生し、テレビのニュースで津波がすべてを呑み込んでいく光景を見ていました。単に「津波が来て被害がとても大きかった。多くの人々が亡くなった。」という情報を聞いても、私は物語の一部にしか思えません。実際に見ていないし、まだ幼かったこともあって今でもどうしても人ごとにしか思えません。たくさんの方が目の前で亡くなる環境が続き、生と死

の境目が分からなくなっていたということ。大川小学校では児童の数が少なく、津波が来るほんの数時間前まで走り回っていたこと。実際の現場を見ても、体験した方のお話を聞いてもしっかりと情景を思い浮かべることはできませんでした。何も経験したことのない私には分かりもしなければ想像さえできない出来事だということがあらためて身に染みて分かりました。



とても短い時間でしたが、本当に多くのことを学べる機会でした。三重には絶対には知ることのなかった、被災された本人のその時の心情や今の心情なども知ることができました。交流のバーベキューや質問の時間などで現地の方と「また質問してきてね。」と連絡先を教えてくださいました方もいて、とてもうれしかったです。

本当にいい体験のできた3日間でした。次は長期間で東北に行きたい、そしてより防災に力を入れていきたい、と思える体験でした。

津西高校 1年 ****

私は、今回はじめての県外でのボランティア活動をしました。防災ボランティアということでもとても興味があったので参加させてもらいました。

事前学習からしっかり宮城や福島で起こったことを勉強できてとてもよかったです。事前学習をしたことでボランティアへ行くための気持ちが変わりました。もし南海トラフ巨大地震が起こったら私はどうしたらいいのだろうと考えながら活動しました。



まず1日目はずっとバス移動でした。ビデオ学習をしました。そこで大川小学校と野蒜小学校であったことについて学びました。夜はあおい集会所で寝袋で寝ました。初めての体験だったので、少し不安だったけどよく眠ることができました。

2日目のはじめに、大川小学校で語り手の方からお話を聞きました。その方は小6の娘を津波で亡くしたと言っていました。学校だから安全だ、と親のみんなが思って安心していたのに、高台に避難せずに子供108人中74人が犠牲になり教員は11人中10人が犠牲になりました。地震発生から津波が来るまで50分あったのに逃げたのが残りの1分だけだったと聞いて私は驚きました。しかも山に逃げたのではなく海側に逃げたのでさらに驚きました。そこで疑問がでてきました。そして地元の高校生とHUGというゲームをしてから地元の地域の方たちとBBQをしました。実際に津波を見た方や家を流された方の話を聞くことができ、とても貴重な体験ができました。夜は台風の影響で風呂に入れず、タオルで体をふくだけでした。初めての体験だったのでちょっと楽しかったです。

3日目に富岡町でバリケードだらけの帰宅困難区域に行きました。

私はこの3日間で防災に対する意識が高まったような気がします。実際に災害が起きたとき、自分から動けるような人になるようにこれからもがんばろうと思います。

松阪商業高校 3年 ****



私は今回で2回目の参加になりました。昨年の際は、旧大川小学校や旧野蒜駅で語り部の方のお話を聞いて、メモをすることに必死であり深く考えることができませんでした。今回、2回目とあって昨年より少し余裕ができ、亡くなった教職員の方達や児童たちの気持ちなど深く考えることができました。特に旧大川小学校では、昨年は説明だけだった裏山のふもとに行くことができ、とても貴重な体験をさせていただきました。

今年は台風の影響で3日間しか滞在できず、3日目に訪れる予定だった旧野蒜駅には行けませんでした。福島県の富岡町の様子だけでも見れてよかったです。富岡町では、昨年と同様に沢山の放射性廃棄物が残っており、昨年と比べてあまり復興が進んでいないと感じました。こういった現状をマスコミは報道しないので今の福島について知っている人は少ないだろうと思うと同時に悲しくなりました。

また泊まらせていただいた集会所では急だったのですが、リーダーをさせていただきました。不慣れなことも多く沢山の沢山人達に助けられました。私はこのボランティア活動の沢山人と出会えることや、初めて会った人同士でもお互いに助け合いながら活動できるところがとても素晴らしいと思います。そして、この活動で見てきたことや聞いてきたことを自分の学校の生徒だけでなく、先生達にも伝えていきたいと思っています。

私は高校3年生なのでこの活動に参加できるのは最後になりますが、今回参加したメンバー達が東北の現状をできるだけ多くの人に伝え、少しでも多くの人にこの活動などを知ってもらい、参加する生徒が増えてほしいと思います。そして、南海トラフ巨大地震に向けて東日本大震災で被災した方たちが教えてくれたことを大切に、家族や学校、友達などと今一度防災について話し合いたいと思いました。



宇治山田高校 2年 ****



私はこのボランティアに参加したのは2回目ですが今回は前回のときと比較して、しっかり被災地を視察して今の現状を見たいと思って参加しました。全体的に少しずつだけ復興に近づいていっているんだと感じました。しかし、地域によって復興に向かっていくスピードが全く違うということを実感しました。このことを肌で感じたのは、福島県富岡町に行ったときでした。私は一度福島県を訪れたことがあったため、最初はすごく辺りが変わっ

ていて驚きました。私が前回福島県を訪れたときは、東日本大震災が起こった3.11のあの日からほぼ全く変わってなかったことを覚えています。今回バスから見た景色は前回と一変し、主に住宅等、建物が建っていました。建物が建ったのは最近のことだと聞きました。復興が少しずつでも進んでいることはすごく良いことだけど、一方で、地元の人たちの気持

ちも知ることができました。語り部の人は自分たちが放射線の影響で自分の町に帰れていない間にたくさんのことが変わってしまい、受け止めきれない気持ちもあると言っていました。確かに放射線の影響を受けていない地域では、その地域で集って相談してこれからの町づくりを話し合えると聞いた覚えがありました。放射線の影響を受けた、受けていない関係なく、自分が生まれ育った思い出がたくさん詰まった町がどんどん変わっていくのを見ていく気持ちを想像すると何とも言えない複雑な気持ちになりました。地元や地元の人々を守るため



にはやはり重要なのは防災意識で、その高め方を聞いて私はなるほどと思いました。なぜここに住みたいと思ったか。町の良いところを考え、ここに住むには防災が必要だと理解すること、つまり、地元愛を高めることが大切だそうです。私はそういう機会をこれからその町に住む子どもに与える方法があればと思います。そこで、学習したことを子どもが大人に伝えれば良いと思うからです。

宇治山田商業高校 3年 ***

私は今回、8月6日から8日までの3日間、初めて学校防災ボランティアに参加させていただきました。私がこのボランティアに参加した理由は、私たちが生きていくときに必ず起こるといわれている南海トラフ地震の備え方を実際に被災地に行って、直接見たり聞いたりして学びたいと思ったからです。

このボランティアに参加して印象に残っていることが2つあります。

一つ目は、旧大川小学校です。最初に見たときに学校だと分かりませんでした。くずれている教室の黒板を見て「ここは学校だったんだ」とやっと納得することができました。むきだしになった教室や渡りろうかを見て、津波の破壊力を実感しました。旧大川小学校では多くの生徒や教師の方々が亡くなっています。「避難しようとした際に津波とはち合わせした」と聞いて、その時生徒や教師の人たちは何を思ったんだろうと考えると胸がとても苦しくなります。



二つ目は、ボランティア最終日に行った福島県の富岡町です。立入禁止区域のところでは家やその他の建物にバリケードやテープで出入りできないようにしてあったのが衝撃的でした。人の気配も全く感じる事ができなくて、原発事故の恐ろしさをあらためて知りました。

この活動で、普段授業では聞くことのできないお話をたくさん聞くことができました。防災知識や災害に対する関心がより高くなったと思います。やらなければならない対策をおこたらずしっかり行うことこそが一人でも多くの命を救うという、基本的で、しかし一番大事なことをこのボランティアで学ぶことができました。そして、この活動で得たことを多くの人に伝えていきたいと思いました。

宇治山田商業高校 3年 * * * *



今までテレビや新聞などのメディアでしか見ることのなかった被災地を実際に肌で感じることで、どこか他人事に考えていた津波を自分事のように考えることができました。津波がまちのすべてを飲み込んでいく映像は何度も見てきましたが、どうしても現実には起きたこととは思えなかったため、自分の目で確認したいと思い、参加を決意しました。一番衝撃的だったのは旧大川小学校です。初めて見た時は何が起きたのかわかりませんでした。天井にまで津波が達していた痕跡を見て、やっと津波の恐ろしさを実感しました。ほとんどの児童と教師が津波の犠牲になってしまったという事実がとても悲しいです。避難している時に正面から津波がおそってきて教師は児童を抱きしめることしかできなかったこと、近くの山に逃げようとした児童を連れ戻してしまったことへの気持ちは当事者にしかわからないけれど想像するだけで胸が苦しくなりました。小学校の校庭で楽しく遊んでいる時の写真とともに当時の様子をたくさんお話していただきました。私が一番辛く感じたのは、「旧」大川小学校になってしまったことです。もうあの頃の小学校ではなくなってしまったんだと思っていたけれど、子どもたちはずっと僕たちの中に生きているという言葉聞き、現地の方はずっと前を見て少しずつ進んでいるんだなと感動しました。ほかにも福島原発事故の影響を受けたまちは人がなくて寂しい空気が漂っていましたが、名物の桜を見るためにも、また訪れたいと思いました。どこの地でも、まち自体の復旧が進んでいなくても住民の方は1ミリでも前に進んでいることを強く感じました。台風の影響で1日分の予定がなくなってしまったので、また宮城、福島に行って新しい発見をしたいと思いました。今回学んだことは自分にとって財産になりました。貴重な時間を過ごすことができるとても充実した3日間でした。



南伊勢高校南勢校舎 1年 * * * *



私が住む南伊勢町はいつ来てもおかしくないといわれている南海トラフ大地震により甚大な被害が予想されています。その災害から南伊勢町の被害がいかに少なくできるか、人命を助けられるかを東日本大震災で被災された方々から学べるいい機会だと思ったので、参加しました。2日目の旧大川小学校でお子さんを亡くされた、佐藤さんの案内がとても心に重く伝わってきました。二度とこのようなことが起きてはいけない、という佐藤さんたちの思いを私たちも共有し南伊勢町で同じことが起こらないようにしなければと強く思いました。地元の高校生との交流会では、避難所運営ゲームのHUGをしました。私はHUGをするのが2回目で、1回目の時は運営側のプレイヤーでした。次々に来る避難者カードに追われて焦りもあり避難所運営とは実際にも混乱するのだと、感じられました。今回でHUGは

2回目で何となく流れが分かっていたので、カードを読み上げる係をして、伝えることの難しき、重要性を感じました。9月1日の南伊勢町防災訓練実施後、私たちの地区では自主防災組織の人や団体の人たちで、HUGをしますが、そこでも、交流会で学んだHUGを活かして参加します。まだまだ、HUGを知らない人も多く、今後も開催していけたら良いなと思っています。

2日目のお風呂は台風やバスの運転手の規則などが重なり、この日はタオルを湯につけて絞ったもので身体を拭くという感じになりましたが、最初は少しためらいや抵抗がありましたが、こういうのは避難所生活をするようになったとき必ずやると思うので良い経験ができたと思っていました。

福島県の帰宅困難区域にバスで入って今の状況を実際に見てとても厳重にされていて僕たちはバスの中での密閉された空間で窓越しに撮影をしていましたが、原発事故前は普通の生活を送っていたことを考えてみると放射線というのは恐ろしいものだと思います。

鬼頭先生と大学生サポーターのおかげで今後活かせる経験ができました。

南伊勢高校学生会校舎 1年 ****



私が出かける前に立てた目標は「事前学習で学んだことを発揮し、自分で調べたことを活かし、現地の人達と交流、自分に何ができるかを考える」だったんですけど、自分的には達成できたと思います。この3日間の東北ボランティアの中で、旧大川小学校で話を聞いたりなど、現地の人の生の声を聴いて、今自分にできることは何なのかを考えることができたからです。

今回、3日間の東北ボランティアに参加して、今自分にできること、今後自分がしなくてはならないことが分かりました。それは、「身近なところからでも良いから、皆に伝える」。身近というのは、家族のことです。自分の中だけで、今まで教えてもらって学んだことをとめておくのは違うと思ったので、今、自分にできることは、「身近なところからでも良いから、皆に伝える」だと思います。

もう一つは、今回参加した東北ボランティアや地域の防災訓練に積極的に参加することだと思います。

今回私が初めて東北ボランティアに参加して、一番印象に残ったのは、3日目の福島県の視察で行った「帰還困難区域」です。僕は正直、この「帰還困難区域」に行く前は「ある程度は復興し終わって、7年もたてば終わってるかも」と心の中で思っていました。でも、実際に現地に行って私が一番最初に思ったのは、「ここまるで日本じゃない」と思いました。なぜかという、そこは「福島第一原子力発電所」の事故の影響でなかなか復興が進まなく、震災があった当時のままの姿でした。所々の家は屋根がこわれたままで悲惨な状況でした。

そして、一番おどろいたのは、その「帰還困難区域」で家の入口とかなどに中に入れないようにバリケードがしてあったところ。それを見た時、私は変な気持ちになりました。なぜかという、このような光景を見たのは初めてだったし、震災から7年たってもこのような状況が続いていると知らなかったからです。



南伊勢高校年度会校舎 1年 ****

僕は初めてボランティア活動に参加しました。なぜ、東北ボランティアに参加しようと思ったかという教室に貼られていた東北ボランティアという紙を見たのがきっかけです。その紙を見た瞬間行きたいという思いがこみ上げてきました。その後、友達を誘い一緒に行くことになりました。日にちが近づくにつれ、緊張していきました。そして迎えた当日、まだ話したことの無い人達と同じバスに乗り宮城県に向かいました。その日は1日バスの中での行動だけでした。2日目は、旧大川小学校の視察に行きました。その時、旧大川小学校の事を教えてくれた佐藤さんの話を聞いて胸が痛くなりました。3日目は、台風のため1日予定を早めることになりました。最終日は、福島県双葉郡富岡町原発被害の視察をしました。仲山さんから聞いた話で自分の家に行ったきり帰ってこない人もいるということを知ってとてもかなしかったです。この3日間のことをまとめると1日目はつらかったけど2日目、3日目は被害にあった地域に行くことができ、たくさん得ることができました。



鳥羽高校 2年 ****



私は中学2年生の時に一度このボランティアに参加させていただきました。なぜ私は2回目を参加しようと思ったのは前回参加させていただいた時に大学生リーダーさんだった方にまたあるから来て今の被災地を見てほしいと言ってもらったのでせっかくならと思ったのと前回の被災地と今の被災地と見比べて風景を思い出しつつ今回学んだことを自分に身につけ今後活かせるように頑張りたいと思ったので参加しました。

今回1日目はバスの中でのビデオ学習で、もし被災者の方を自分に置換えて考えてみたらすごく言葉にできないぐらい絶望してしまうだろうなと思いました。それでもテレビなどの取材を受けているのはすごいなと思いました。

2日目は大川小学校に行き被災して亡くなった子どものお父さんが大川小学校をガイドしてくれました。ここでは沢山の教訓を教えてくださいました。私が一番忘れてはいけないと思ったのは「災害は特別の日、特別の時間には来ない。いつもと変わらない普通の日に来る」と聞いてこれは絶対忘れてはいけないと思いました。また、1日1日を大切に過ごしちょっとした挨拶、会話などを大切にしていきたいと思いました。

交流会ではたくさんの方の講話を聞きました。鈴木さんの講話では避難訓練の大切さが分かりました。避難訓練は避難経路を確認できるだけでなく地域の人たちの把握ができ自助・共助ができる関係ができ犠牲者を減らすことができると聞いてすごい、そんなこととも思いました。ゲームでは運営の大切さが分かりました。夕食を食べながら3人の方たちの講話も聞きました。その中で私は初めて聞いた言葉がありました。「未災地」という言葉です。この言葉は未だに災害が来てない地域や世代交代で被災地から未災地に戻るという意味で初めての言葉を聞いてまた一つ勉強になって良かったです。

3日目は福島で講話を聞きました。雨だったのでバスで移動しながら案内していただきました。まずぱっと見、前回より新しい家が建っていてうれしかったです。でも、まだ自分の家に戻れない人がいると聞いてそれだけ原子力の力は強いとあらためて思いました。

今回のボランティアで前回に参加したけど分からないこともあって再発見や初めてのこともあってまた一つ勉強になったなと思いました。今回、私たちのために用意してくれた人、講話や色々話してくれたり教えてくれた方に感謝しかないです。全然、計画通りすすまなかったのですが参加してよかったです。



名張高校 2年 ****



今回、この東北ボランティアに参加しようと思ったのは、テレビなどの画面越しでしかみたことのない被災地を、自分の目で、生でみて、現地の方から直接話を聞いて、学習しようと思ったからです。

一番印象に残っているのが、最後に行った福島県です。放射線量が多くて、立ち入りを禁止されている場所もあると知りました。バスの中からの見学でしたが、やはり、人はとても少なく、建物も7年前のそのままの形で残されていました。普段、私の地域で、よく行くお店の壁が大きくはがれていたり、鉄骨がむき出しになっているのを見て、津波、地震の力が、とても怖いものだと感じました。

集会所でみた、当時の映像、津波の被害にあった人から直接話をききました。津波の映像は、とても恐ろしいもので、短時間で多くの2階建ての建物が飲み込まれていました。この映像をみた時、津波の威力がこれほどまでも恐ろしいのかと初めて思いました。水の量は尋常ではなく、どうなっているのかと、疑う程でした。

当時、津波の被害にあった方からは、津波は水だから、泳げるし、自分は大丈夫と思っている人が一番危ないとききました。確かに泳げるかもしれないけど、津波の災害にあった人の一番の死因は、木などが流れてきて、その木が原因で、首や手足などを切って亡くなるということを知りました。私は溺れたりするのが死因だと思っていたので、初めてきくことができ良かったです。



津波がきているのに、めずらしい、すごいと思ってずっと近くでみていた人、なかなか逃げようとしないう人もカメラに映っていました。旧大川小学校の子どもたちも、すぐに逃げれば助かっていた、という話も聞いたので、やっぱりすぐに逃げるのが大事だと思います。そのために避難訓練や防災グッズを整えておくことが大切だとあらためて感じました。

名張高校 2年 ****

私は今回初めて、東北ボランティアに参加させていただきました。このボランティアから私は多くのことを学びました。

まず、2日目の朝に大川小学校を訪問させていただきました。語り部の方が語ってくださった中で、すぐ近くに逃げられる山があったにもかかわらず、多くの生徒が津波にのまれたという話が印象に残りました。その山には何回も登ったことがあり、避難すれば助かっていたはずの命を助けることができなかったという先生の話聞いたときは本当に心が苦しくなりました。そして、津波がどれほど恐ろしい災害なのかを、自分の目で知ることができました。

2日目のバーベキューの夕食の後、津波から生還した方の話や、当時学生だった方の話を聞かせていただきました。当時学生だった方の話を聞くと、自分も今高校生であるということから、その方のつらさが少し分かる気がしました。目の前で人が津波に流されていったという話を聞いて、そのような恐ろしい光景を見て、心の傷も深いと思うのに自ら津波の恐ろしさや経験を語り、未来の人に伝えていくことができる強さに感銘を受けました。



3日目からは台風の影響で早く帰ってしまうことになり残念に思いました。しかし福島第一原発の近くの帰還困難区域を見ることができました。そこは、本当にここは人がいたのかと思うほど家の中が散らかっていたりする光景がありました。それを見て、これまで想像していたものとは全くかけ離れていて驚きと悲しさでいっぱいになりました。もし私の住んでいる地域が同じようになったらと考えると、他人事とは思えませんでした。

私にとっては3日間の短いボランティアでしたが、被災地の方にとってはこれがまだ先も続くということを考えるととても心が痛くなりました。このボランティアで大切なことはこのことを過去のものにするのではなく伝えていくことだと思います。この経験を忘れず、私から周りに発信していこうと思いました。

木本高校 1年 ****

今回この事業に参加して思ったことは、当時の出来事を調べたことと実際に被災された方から話を聞くのでは、全然印象が違ったということです。

2日目大川小学校へ行って佐藤さんの話を聞き、涙が出そうになりました。自分の子どもが、たくさんの人たちが津波にのみこまれていったこと、津波がおさまった後のこと、事前に調べるだけでは到底想像できない話ばかりでした。私には子どもはいないけど、弟や両親、たくさんの友達がこのようにして亡くなって



しまったら、私はたえることができないと思いました。

雁部さんの話を聞いた時も佐藤さんの話を聞いた時と同じような気持ちになりました。でも、雁部さんのほうが年齢が近い分より共感できる部分が多かった気がします。小学生のときにとってもつらい思いをしたのに、中学生のときから語り部をしているのはすごいと思いました。こうやって経験したことを語ってくれているから、そのときのつらさやこれから起こる災害で悲しい思いをしないようにどうすればいいのかを考えさせられます。

福島の方は津波被害とはまた違った苦しさがあったと思います。何年もの間家に帰れなかったり、少し前だったら町にも入れなかったと聞きました。住めるようになった町でも戻ってくる人が少ないと聞き少しさみしくなりました。これからどのくらいかかるか分かりませんができるだけ早く復興してほしいです。

私は正直ボランティアができることはあまり多くないと思いました。でも必ずできることがあります。これからは少しでも助けになることがあればしていきたいです。あと、たくさんの人に学んだことを知ってもらうため、まずは家族や友達からでも話していきたいと思います。



(中学生)

東員町立東員第二中学校 3年 ***



私は今回初めて防災ボランティアに参加させていただきました。東日本大震災が起こった時のことは何も覚えておらず、被災地が今どういう状況なのかを学びたかったため、参加することにしました。

私が一番印象に残っていることは、旧大川小学校のことです。旧大川小学校を見て思ったことは、「本当にここに子ども達がいたのだろうか」ということでした。学校といわれても建物を見ただけでは分かりませんでした。

でも、佐藤さんのお話を聞いているうちに、「ここは子ども達が楽しく過ごしていた場所だったんだ」と認識できました。この旧大川小学校は山に逃げていれば、ほとんどの命を救うことができたと思います。子ども達は山に逃げようとしていたのに、どうして逃げることができずに命を落としてしまったのか。津波が来るまでの時間、死を覚悟した子もいたそうです。私はそのことを知り驚いたけれど、とても危険な状況でそう考えるしかなかったのだと思います。佐藤さんは「救えた命は救いたかった命だ。」とおっしゃっていました。本当なら救えたはずの命が救えなかったことは、とても悲しすぎます。このようなことは二度と繰り返したくありません。

最終日に視察した福島では、私の想像していたこととはほとんど違っていました。例えば、私はもう建物は撤去されているのだと思っていたけれど、そのまま残っていたことなどです。一番驚いたことは、フェンスが張ってあってたくさんの所が規制されていたことです。自分の家に帰りたいけれども帰ることができません。家に帰れない辛さはどれほどのものなのかが私には考えられません。なるべく多くの方に地元で生活してもらいたいです。

今回のボランティアは台風で3日間しか滞在することができなかったけれど、貴重な体験ができてとても勉強になりました。お世話になった方々に感謝しています。



四日市市立大池中学校 1年 ***



私は今回の学校防災ボランティア事業でいろいろな大切なことを学ばせてもらいました。その中で一番心に残った、大川小学校で感じたことを紹介したいと思います。

まず、大川小学校では108人の子どもたちが通っていました。それは、かけがえのない命でもありました。しかし、その命は東日本大震災によってうばわれたのでした。しかし、この命は救えない命だったのでしょ

うか。それは違います。74人の命は救える命だったので。それを聞いて感じたのは、子どもたちの命をむだにはいけない、ということです。これ以上このような悲しい出来事が起き

ないように災害に対して深く考える必要があると思います。やはり大地震がきたら避難が大切であります。しかし、大川小学校が避難しなかったわけではありません。グラウンドに避難はしていたのです。ですが、津波は来ないという判断ですぐ後ろにあった裏山に避難しなかったのです。ここから考えられるのは、災害というものは何が起こるかわからないという



ことです。もともと大川小学校のある位置は、ハザードマップで確認すると津波が来ないと予測されていたのです。大事なのは、ハザードマップはあくまでも予測ということです。災害時は今の状況を見て、避難することが大事なのです。

最後に、「災害は何が起きるかわからない」という言葉を忘れずに、東日本大震災で亡くなった方々のためにも、実際の災害時にいかす必要があるのです。

四日市市立大池中学校 1年 ****



自分はこのボランティアでの感想はまず、実際の被災地に行ったことでどんな被害を受けたかも見ていつおきるかわからない自然災害の恐ろしさをあらためて知りました。そして、被災者の方の体験を聞くこともでき、いろんな方のいろんな思いが伝わって、でもみなさん前向きですごいなと思いました。普段の生活でも前向きでいることが大切だなと思いました。災害時には小中学生が大切だと現地の方がおっしゃっていました。

災害時では子どもの力で救われる方もいると思いました。まとめとしてこのボランティアで思ったことはなにがおこるかわからない自然災害がおきたときの対応のしかたを知ったことや災害時では、大人だけではなく子どもの力もとても必要だと知りました。そしてとても貴重な時間で行ったことをとてもよかったと思っています。

暁中学校 3年 ****

私がこのボランティアに参加した動機は、2つあります。1つ目は、前回東北へボランティア活動をしに行ったときに、地元の方々に感謝のお言葉をいただいたからです。また力になりたいと思いました。2つ目は、今後身近に起こりうる南海トラフ巨大地震の被害を小さくするために、正しい知識を伝えていきたいと思ったからです。今回また東北に行ってみて、前回とは違った考え方ができるようになりました。今回のボランティアで最も印象深かったのは大川小学校でのお話でした。今、大川小学校というと津波で被害を受けたという特別なイメージがあるのかもしれませんが、私自身、大変な被害にあった学校というイメージを持っていました。ですが、佐藤さんは、「3・11より前の大川小学校は、津波の



場所ではない普通の学校だった。小学生108人が楽しく学びあっていた。」とっていました。私はその言葉を聞いて、はっとしました。東北は3・11の前は被災地ではなく、大川小学校はどこにでもあるような平和な小学校だったのです。それを地震や津波が全てさらっていった残酷さをあらためて感じました。そして、それこそが私たちが忘れてしまっはいけないことだと思いました。平和な明日の空は当たり前やって来なくて、もし今すぐに災害が起こってしまったら壊されてしまう儚いものなのだとすることを常に頭に入れておこうと思います。

明日地震が起こったら・・・今からすぐにできることはたくさんあると思います。だからこそ、『今』自分に何ができるのか、自分と向きあいながら日々を過ごしていくべきだと思います。



朝日町立朝日中学校 2年 ****



私は、今回のボランティア事業に参加してたくさん学ぶことができました。そして、災害がどれだけおそろしいか身をもって思い知ることになりました。

1日目のバス移動中に見たビデオで、特に印象に残っているのが、原発事故で放射線が空气中に汚染し、いまだに家に帰れていない女子学生の言葉でした。被災し、転校した先の学校でいじめにあった彼女は、なにもかもを「どうでもいい」と思うようになったと言っていました。その言葉を聞いて、大災害は数年たっても人々を苦しめているのか、と思いました。しかし、彼女の前向きな姿を見て立ち直れる強さを持つのも人間なんだなと同じに思いました。

2日目に行った大川小学校がすごく強烈に目に焼きついています。被災した学校の様子を見ながら話を聞いていると当時の様子が伝わってきました。佐藤さんの話の中で「救ってほしかった命」は「救えた命」だった。しかし、「救いたい命」は「救えなかった命」になってしまったのはその場の判断力と決断力が足りなかったからだと言っていました。教師に、怒りなどといった感情はないのかなと思っていましたが、教師たちに対して恨みはないと言っていました。そして、私たちに日ごろからきちんと災害のことをよく頭に入れておくことが大切だと言っていました。災害はなんでもない日常にやってくると聞いて鳥肌が立ちました。

その後、あおい地区に戻って講話を聞きました。雁部那由多さんの経験を知り、すごいそうぜつな災害にあったんだなと感じました。質問タイムのときになぜ語り部を始めたのかという問いが出て「震災体験は持っているだけならただの嫌な思い出。伝えることで人の命を救う価値となる」という言葉をきっかけに始めたそうです。いろいろな人の話を聞けてとてもためになったなあと思いました。日頃から危機感を持ち生活したいなあと思いました。



鈴鹿市立白鳥中学校 3年 * * * *

今回のボランティア事業は初参加でしたが緊張などはあまりなく、誰とでも気楽に接することができて良かったです。新しい友達や先生方もできてうれしかったです。

現地ではたくさんの方のことを勉強できました。自分が一番心に残っているのは大川小学校で佐藤敏郎さんに聞いたお話と合同防災学習会です。

佐藤さんのお話の中でも小学校の児童や先生らがどのようにお亡くなりになったのかという話を聞いたとき、津波の怖さ、恐ろしさを身に覚えしました。

実際に私が視察で立って歩いていた旧大川小でおこったことを思うと自然と胸がしめつけられました。旧大川小での震災での出来事をそのままにしておいて、くやむだけではなく、いつかまたくる地震に役立たせたい。たくさんの方に災害の怖さを伝え、防災について考えなおしてほしいと強く思いました。

合同防災学習会ではうれしいことに三重県の防災取組についての発表をやらせていただきました。0からがんばってつくったパワーポイントに前日まで考えていたカンペ。発表は少しマイペースな感じでグダッた気がしましたが、みなさんには言いたいことが伝わっていたみたいで安心しました。

他の学校の防災取り組みをきいてたくさんためになりました。三重の方では行っていない取り組みなどがあったので、学校の発表で重点的に話し提案しようと思いました。

最後に今回のボランティア事業では大変なことがたくさんあって、もうどうなるかと思いました。土日はイベントの出演で丸二日踊りへトヘトのままボランティア事業に行き、夜は人が多いところではねれず、不眠症もあった上に非常にさむく、かなり気分が落ちこみましたが、逆に考えるとこんな過酷な状態の中でもたえきった被災者さんたちを思うと本当にすごいなと思いました。自分を強くするためにもいい経験でした。

今回の経験を学校でする発表にぶつきたいと思います。災害がくる前にできることを最後までいっしょうけんめいやりとげたいです。

まだまだ充分ではない防災意識が少しでも高められたらうれしいです。今私ができることを最後までがんばります。



亀山市立関中学校 2年 * * * *

私は、初めてボランティアに参加させていただきました。小学生の時、東日本大震災が起こり、その頃はあまり身近な出来事とは思っていませんでしたが、学校の授業で当時の映像を見て、その恐ろしい光景が目には焼きつきました。今年の3月、救助活動の様子をTVで見て、あらためて「私にも何かできることがあるのではないかと考えるようになり



ました。今までTV、新聞でしか知ることのできなかつた色々な話を現地で聞けると楽しみでした。4日間ある予定が台風のため1日早く帰ることになりとても残念でした。2日目は旧大川小学校に行き佐藤さんにお話を聞きました。実際の建物を見ると震災当時のまま天井は崩れ落ち、教室にあった机や椅子はありませんでした。2階の渡り廊下が根元から地面に落ちていきました。話を聞きながらその日、先生や生徒たちがどんな思いで校庭にいたかを考えていました。私は恐怖でしか考えられません。自分たちは災害にあった時に三重県でど



んな行動が出来るのか?と考えた時、多くの情報を把握していち早く行動することだと思えます。三重県で起こるかもしれない南海トラフ大地震に向けて考えなければならないです。ボランティアで学んだことを活かしてみんなに防災について話ができたらと思えます。今回のボランティア事業に参加していた人達は皆、初めて会う人ばかりでした。3日間で色々な人と交流でき、楽しかったです。又是非参加したいと思えます。

津市立豊里中学校 2年 ****

僕は去年も参加して、今回で2回目の参加となりました。今年は、大川小学校と失本第二中学校と、福島県富岡町に訪れ、勉強しました。僕の今回の目標は、去年の参加をして、疑問に思ったことを聞く。それと、前回よりも知識を増やす。この2つです。1つ目の目標は、聞く機会が少なく守れませんでした。2つ目の目標は守ることができました。いろいろ知識を増やすことはできました。その中でもすごかったのは、富岡町の人口が去年より500人も増えていたことです。200人から700人にも増えたそうです。大川小学校で、東日本大震災のことを伝え続けている佐藤さんと、富岡町の仲山さんが、あれから7年間も伝え続けていることはすごいと思えました。伝え続けることに意味があるとはそういう意味だったのだと、あらためて思えることができました。そして、これはいい知識だと思えたこともありました。



地域を災害から守るということは、地域を愛することと同じということです。このことを教えてくれたのは、あおい地区での交流の時の、雁部さんが教えてくれました。今年も参加できて、本当に良かったと思えます。現地の人たちから話を聞くというのはめったにない機会でした。今年参加して、学んできたことを、いろいろな人に伝え、防災について考えなおしてほしいと思えました。本当にありがとうございました。

三重大学教育学部附属中学校 1年 ****

東日本大震災。私はそれをあまり知らなかった。地震だ、津波だと言われてもピンとこなかった。災害が起きて、自分は生き残れるだろうと、油断していた。でも、その考えが、この「学校防災ボランティア事業」で変わった。私の考えを変えた言葉は全て語り部の方が変えてくれた。



一つ目は、大川小学校で語り部をしてくれた、佐藤さんの言葉だった、その言葉は、生き残るためには、とても重要な言葉だと思う。「救えた命、救ってほしかった命、救いたかった命。命を救うのは、判断と行動です。」佐藤さんは、東日本大震災で自分の子どもを亡くしたそうだ。大川小学校は、避難に遅れて多くの生徒や教師を失った。だから、救えた命。「大川小学校を信じていたのに・・・」という保護者は、自分の子どもを救ってほしかったと思う。だから、救ってほしかった命。そして何より、かけがえのない大切な娘を救いたかっただろう。だから、救いたかった命。判断と行動。それだけで多くの命を救うことができるのだ。

二つ目は、ビデオで見た、今野さんのお話だ。「じいじ」と呼んで離れない孫がかわいかった。同時に三人も孫を亡くして、つらい日々だろう。三月十一日のことは、覚えていてもらうより、忘れないでほしいそうだ。この東日本大震災を忘れてしまったら、被災者の方の多くの悲しみ、苦しみを忘れてしまうと思う。もう、同じ失敗をくり返してはならないから、二度と、こんなことが起きないようにしたい。

東日本大震災には、多くの悲しみと痛みが隠されている。これ以上、災害による死者や悲しむ人を増やさないために、東日本大震災での教訓を活かして、私たちが南海トラフ地震から、人々を守れるようになりたい。

伊勢市立豊浜中学校 3年 ****



今回、このボランティア事業で私は初め、震災であった辛い出来事を話すんだなと思っていました。だけど、実際話を聞いてみると、震災前の大川小学校の明るい話や、語り部のみんなも楽しそうに話しているところを見たとき「みんな悲しいことばかり考えているんじゃないんだな」と感じました。それでも、辛かったことははっきり辛いと言って私たちに真剣に話しているところを見て「震災は人を強くするんだな」と思いました。

一番印象に残った場所は旧大川小学校でした。話をしてくれた佐藤さんは小学6年の娘を亡くしました。佐藤さんは私が事前に調べ、なぜ74人も被害にあったのかなどを暗に感じて話すのかなと思っていました。しかし、初めに話したのはこの旧大川小学校がきれいに掃除されていることや生徒達はみんな一輪車に乗っていたなど、明るい話からしました。私は少し驚きました。でも少し経ってから思いました。きれいな思い出は辛い出来事に上書きされずにいるんだなって。それから命の尊さについて語ってくれました。「1人1人のすべての命に意味がある」ということが今回の出来事で実感しました。大川小学校を初め、このボランティア事業での出来事は私にとって一生忘れない思い出になりました。これから、友達や家族に少しでも命の尊さや震災での出来事を伝えていきたいと思います。

伊勢市立北浜中学校 1年 ****

僕は東北のボランティアに初めて参加させてもらいました。このボランティアに参加しようと思った理由は、このボランティアで学んだことを地域などの人たちにそのことを話して、もしものときに備えられるようにしたいと思ったからです。僕がこのボランティアで学んで分かったことは、富岡町では、放射性廃棄物が黒い袋の中に入っていたり旧大川小学校の先生たちは、なぜ子どもたちを守りたかったはずなのに、はやく川の方でなく山の方に逃げなかったのを、僕は、疑問でしか思えませんでした。そして、避難準備は3日分ですが大災害の時は、1週間分必要かもしれません。この東北のボランティアは、3日しか活動できなかったけど、いろいろなことを学んだり見たりできて、防災についていろいろ考えたボランティア活動になりました。



志摩市立磯部中学校 2年 ****

私が、このボランティア事業に参加しようと思ったきっかけは、去年の文化祭で、先輩がこのボランティアで学んだことを発表していて、「私も行ってみたい!」と思ったからです。私は、東日本大震災のことは新聞やテレビで見る風景しか知らなかったもので、実際に自分の目で見たり、現地の人に話を聞いたりして確かめたいと思い、参加を決めました。私がテレビや新聞を見て勝手にもっていた東北のイメージは、ガレキばかりの町でした。宮城県に着いた時に受けた第一印象は「私達の住んでいる町とたいして変わらない町」でした。その印象から、7年間の努力が感じられて、町そのものが復興の証だと思いました。最初から自分の思っていたイメージとは違って、そんな風に3日間は驚きの連続でした。



全てが心に残っているけど、その中で特に心に残っているのは、旧大川小学校での佐藤さんの話と富岡町での仲山さんの話です。

まず、2日目の朝に行った旧大川小学校はなにもない所にたっていました。佐藤さんは「震災前は、家がたちならんでいた」と言っていて津波の怖さを目の当たりにしました。地震が起きてから待機していた50分間・最後に逃げようとした1分間どんな気持ちだったんだろうと考えると言葉も出ませんでした。

次に、3日目の富岡町では、町のいたるところにバリケードがありました。社会の授業で、原発という言葉は習ったけど実際の町の状況は習っていなかったから、とても衝撃的でした。宮城県は、3月11日に変わってしまったけど、福島県は、7年の間に変わってしまったから、大きな違いであり、色々な課題があると思いました。

今回、このボランティア事業に参加させていただいて、本当に良かったです。私が学んだことを、大切な家族や友達・先生に教えてこれから起こると言われている大地震に備えたいです。本当にありがとうございました。

(大学生)

四日市看護医療大学 2年 ****



二日目、四日市看護医療大学の学生は石巻赤十字病院の付属の石巻赤十字看護専門学校を訪問し、防災についての交流を行いました。そこで、私たちは四日市東日本大震災支援の会での活動や経験を、石巻赤十字看護専門学校の学生さんたちは日頃行っている防災対策をプレゼンテーションし、それについてディスカッションを行いました。私たちは地域との連携を通して防災意識を高められるような活動を続けているけれど、石巻赤十字看護専門学校の学生さんたちは学校全体の防災意識がとても高いということに感銘を受けました。私たちは学校としての備蓄がどこにどのくらいあるのかわらなかつたり、学生の中でも意識の違いが大きかったりと、実際に災害が起きたときに動けないのではないかと感じました。石巻赤十字看護専門学校の学生さんたちのように学校全体で防災についてしっかりと対策をとること、個々レベルの意識の向上という課題が見いだせました。災害時、看護を学んでいる私たちは地域から頼られる存在になり得ると思います。そのときにまず自分の命を守れていなければ助け合いをしたり周りを助けたりすることもできません。だからこそ日頃の防災対策がとても大事ということ、そのうえで「自助・共助・公助」を行うことができるのだなと感じました。

また、今回は天候が悪く帰省が一日早まり、出発の前夜はお風呂に入ることができないという状況で、まさに災害でした。急遽、清拭をすることになりましたが中高生は何ひとつ文句を言わず看護学生が仕切る清拭に積極的に協力して動いてくれました。災害時の避難所生活を仮定したときに、中高生がこんなにキビキビ動いたらよい避難所運営をしていけるのではないかと思います。三重県の中高生の代表として防災意識を持ち続けてほしいし、私も同じようにさらに防災意識を高めていきたいです。



(引率教員)

三重県立白子高校 教諭 内山 奈央



第3回学校防災ボランティア事業は、東北での行程短縮・事後学習の延期と2回も台風の影響を受けました。自然災害は私たちの計画や人生などお構いなく発生します。人間の力を超えた力で 私たちに畏敬の念を抱かせます。

2011年3月11日の東北大震災は、2万人もの死者、行方不明者を数えました。

私は、震災1年後から有志の中高生ボランティアとともに東北を訪れています。皆さんのつらさや悲しみは計り知

れなくて、当初、私自身緊張していたのを覚えています。

そんな私たちを東北の皆さんは「来てくれるだけでうれしい。」と歓迎してくださいました。そして中高生たちがいろんな機会に東北での体験を発表するなど防災活動をしたり、東北ボランティアをきっかけに成長する姿をたくさん見てきました。

中学2年で参加した生徒は、地元の方々の三味線・尺八演奏で、民謡を歌う交流で恥ずかしがって歌わなくて申し訳なかったと、もっと人前で自信を持って自分を表現しようと高校では全校生徒の前で研究発表したと聞きました。

不登校になっていた高校2年の時、参加した生徒は、前向きに頑張る東北の皆さんに優しい励ましの言葉をいただき通信制高校に転学、再起を果たし無事就職しました。

今回の学校防災ボランティア事業では防災意識の高いメンバー中高生37名が、三重県各地から集まりました。

震災遺構になった大川小学校では、小学6年だった娘を亡くされた佐藤敏郎さんから学校横の5分もかからず小学1年でも行ける椎茸山を案内してもらい、安全な場所がどれだけ近くにあったかを体感しました。遺族の方々の無念さが身をもって理解できました。

また、あおい地区の集会所では小学5年での震災体験を雁部那由多さんが

『目の前で大人3人が「助けて」と自分に手を伸ばしながら津波に流されていった。波が引いてから、その人たちの死亡を確認して自衛隊に伝えた。』と語ってくれました。地獄のような体験を語れるようになるまでに、どれだけしんどかったか考えました。

福島県富岡町訪問では、平成29年避難指示解除後も450人しか住んでいない町（震災前は、15,000人が居住）の様子を見ました。まだまだ7年前のまま放置されている建物がたくさんあり、朽ち果てていました。バドミントンの世界選手権金メダリスト桃田賢斗の出身校だった県立富岡高校は休校となっていました。新しく建つ建物は原発や除染の作業員の方の住居やホテルばかりということでした。復興が進む宮城県との違い、ふるさとを奪われる無念さに原発の



こわさを感じました。

東北の皆さんから聞く震災時の話は、テレビの前にいた私たちが想像することもできない壮絶な状況ばかりで中高生は真剣に聞き入っていました。

東北の皆さんの苦しみ悲しみを繰り返さないように、未災地に住む私たちは「自助」「共助」「地域の危険」「家具の固定」「非常食・非常時必要な物」「家族の安否確認方法」「地域とのつながり」などすべて、見直し備えなければいけません。

8月26日事後学習会で、鈴木英敬 三重県知事を迎えての報告会が実施されました。

「実際に現地体験したことは説得力を持ち伝えることができる。中高生の皆さんには、ぜひやるべきことを行動に移してほしい」とお言葉をいただきました。

東北での見聞を周囲に広め、今後起こりうる南海トラフ地震での被害を最小に押さえる備えを促す大役を果たすことを期待します。

三重県立聾学校 養護教諭 山中 千聡

今回、この事業に初めて参加しました。私は、3.11後には災害ボランティアとして、またここ数年は被災地のその後の様子を把握するために、何度も東北を訪れています。しかし、この事業を通して新たに訪れた場所や多くの方との出会い・お話等から様々な学びを得ることができました。その中の一つを紹介します。



福島県富岡町の富岡交流サロンには「非破壊式食品放射能測定装置」がありました。これは、畑で育てた野菜や山で採った山菜等の食品の放射能を、簡単な操作で測定できる機器です。初めて目にした機器でしたのでスタッフの方にお話を伺うと、「家の近くは除染されているから畑の作物は大丈夫だけど、山は除染されていないから山菜は基準値を超える」とのことでした。自然の恵みをいただくことが当たり前ではなく、7年5ヶ月が過ぎてもまだ過去と同じようには生活できない実態を知りました。

三重にいと、自らが積極的に行動しないかぎり被災地の様子を知ることはできません。震災関係の番組やイベントも、3月11日前後に行われる程度です。だからこそ、今回のように被災地で学んだこと・感じたことを、事業に参加した私たちから周囲に発信していく必要を強く感じました。

今回は、台風の影響を受けて随時行程を変更することがありました。台風やゲリラ豪雨等の災害に遭遇しやすくなっている昨今、そのような場面に直面した時に、自分の命を守るために主体的に判断し、どのように行動をすればいいのかを、参加者の中高生が学び取ってくれれば嬉しく思います。

鈴鹿市立白鳥中学校 教諭 鈴木 則子



台風13号接近の為3日目の日程がカットされなければ、参加生徒達の防災への理解はさらに深まったことでしょう。その点が大変悔やまれますが、危機管理面において的確な判断だったと思います。12時間かけやっと辿り着いた宮城県と富岡町での滞在で、現地に赴かないとわからないことを沢山学び、考えることができました。そんな有意義で内容の濃い日程を企画して下さった鬼頭先生、米倉さん、松田さんに心から感謝しています。

以前NHKの特集で見た大川小学校の悲劇。自分の眼で確かめたかった。行きのバスの中で見たDVDや語り部の佐藤敏郎さんのお話、そして『大川小学校からのメッセージ』の冊子を読み、佐藤さんや遺族の方々の苦悩が少し理解できた気がした。毎年3月に児童達がしいたけ栽培のため登っていた裏山に、5分もあれば全員が登れる。その裏山に登っていれば全員助かったはずなのに、なぜ津波までの51分間校庭にいたのか。児童の中には裏山に逃げようとした子もいたのに、なぜ戻したのか。その対応の「謎」。遺族の方々の無念さが痛いほど伝わってきた。かけがえのない84名の命は守れたはずなのに...失ってしまったその根底には「大川小学校に津波はこない」という思い込みがあったと思う。ハザードマッ

プにも想定されておらず、むしろ避難所に指定されていた。その想定を津波ははるかに超えてきた。その想定外を児童達は直感で感じ先生に訴えていたのに... 旧大川小学校の周辺はかつて沢山の家があったが、今は一面何もない。児童達の遺体が並べられた橋の袂に建てられた慰霊碑や小4担任の先生の両親が飾っている花の祭壇を見て、胸がしめつけられた。51分の「謎」を解明し、84名の尊い「命」を決して無駄にはしてはいけない。旧大川小学校の「謎」は日本社会が抱えている課題でもあると思った。

津波で大きな傷を抱えながらも、今を懸命に生きようとしている若者達の話が聴くことができた。津波で5歳の弟を亡くした伊藤健人さん。他にも行方不明のままだった母と祖父母を捜していた時、弟が大喜びした青い鯉のぼりを見つけた。「何かしなければ変になりそうだった」伊藤さんが始めた『青い鯉のぼりプロジェクト』。今年も健人さんの弟律君と多くの天国に旅立った子ども達の為に何千もの鯉のぼりが青い空に泳いだ。25歳になった健人さんは故郷東松島市に役立つ人になりたいと市の職員になった。また、目の前で5人が津波に流されていった、その内の1人が彼に手を伸ばしたが、樋に捕まるだけで必死で、その人を助けられなかった小5の雁部那由多さんは、高校生になり自分の体験を語る語り部になった。彼と友人2人の語りの内容が綴られている『16歳の語り部』（ポプラ社）に、津波や避難所での生活とその後が赤裸々に語られていた。3人は同じ小学校で同じ時と惨事を体験しながら、全く体験内容もその感情も違う。しかしそこに語られているすべてが紛れもない真実であり、彼らが苦悩を語ってくれたことで、津波の怖さを知らない私がこれからどうすべきかを深く考えさせられた。雁部さんは今「津波に安全な地域作り」を学ぶ為受験勉強中。必ずや津波に強い街を構築してくれると思う。



日程変更のため、あおい地区の会長小野さんのお話が聴けなかったことと、あおい地区の方々とバーベキューを作りながら交流ができなかったことが残念でならない。

富岡町の帰宅困難地域を通る6号線を通り、語り部さんに案内してもらいながらバスで通過した。耕作放棄された田畑は木や草に覆われ、帰宅できない為草刈ができず草に覆われ自然に戻りつつある家や車。泥棒に窓ガラスを割られ、その為アライグマ等動物が入り込み糞をして取り壊さなくてはならなくなった家。地震で瓦が落ちても直せないため雨水がしみこみ朽ちていく家。新築したばかりの洒落た家。持ち主はどんなに住みたいことだろう。しかしながらどの家にも人は住めない。悲しい風景が続いていた。見た目は何も変わらないのに。帰宅困難地域の道を封鎖するため、一日中仕事をしている方々がいた。そして夥しい黒い除線袋の山、山、山。あの黒い山はあと何年経てば元に戻るのだろうか。



これらは現地に赴かなければわからないことだ。他にもまだまだある。本当に沢山のことを教えられ、考えさせられた。参加生徒達も熱心にメモをとり、学んでいた。今回の訪問を基に、さらに多くのことを学び、考え、防災のために備えなくてはならないことを、多くの人に伝えていってほしいと期待しています。

三重県教育委員会事務局教育総務課 主幹 松田 敦

私がこの事業に参加するのは3年連続3回目となりました。1年目は好天に恵まれ、大変な猛暑の中での実施となり、とにかく暑かったことが記憶に残っています。昨年度はあまり天候に恵まれず、活動が変更されたり、制限されたりしました。そして、今年度も台風の影響を受け、日程が短縮されてしまいました。たくさんの中高生のみなさんが真剣な思いを持って集まってくれていたのに、大変残念に思いました。予定通り実施されていたら、もっともっと素晴らしい成果が収められたことと思います。



さて、話は少し変わりますが、三重県では各学校で学校防災リーダーを選出し、その先生を中心に学校の防災教育・防災対策を進めてもらっています。毎年夏休みに学校防災リーダーを集めての防災研修会を開催しているのですが、今年度初めてその研修会で学校防災ボランティア事業について取り上げました。「災害ボランティア活動の意義と中高生による被災地復興支援」という講義の中で、事業に参加した中高生が学んだことや感想などを発表したり、大学生が災害ボランティア活動での体験などを語ってくれました。

先生たちは、真剣な表情で聞き入っており、事後のアンケートでも「中高生、大学生の体験発表を聞くことができ、大変よかった。」「実際にボランティアを行った子どもたちの話を



を通して、ボランティア活動の意義について考えることができた。」「若い力が必要とされていること、大きな力になることを自分の学校の子どもたちにも伝えたい。」などの声が多数あり、大変好評でした。

私も、若い世代が防災に取り組むことの意義と重要性をあらためて実感しました。今後も微力ながらそのための場を作ったり、橋渡しをしたりしていきたいと決意を新たにしています。

三重県教育委員会事務局教育総務課 主幹 米倉 卓

私たちは普段「災害はひとごとで、自分にはおこらない」と思っているのではないだろうか。だから、いざそうした目にあうと、だれもが「まさか自分が！」とってしまう。

平成16年(2004年)9月29日、台風第21号により各地で猛烈な雨が降り、特に当時の宮川村、海山町では山崩れや床上浸水などで大きな被害が発生した。津市でも浸水被害が発生している。津駅の東側で生活している私のこの時の被災体験を紹介しておこう。



鈴鹿市で仕事をしていた私のもとに、妻から悲鳴のような声で「家の周りが水にあふれていて外に出られない。保育園に子どもを迎えに行ってほしい。」と連絡が入った。

「まさか！家が水につかってしまうのか。」と不安に思いながら帰ってくると、三重大学付近の道路は既に30cmほど水につかっており、車がまともに走れない。ついに、自分の車もストップしてしまった。時間とともにだんだん水が車の中に入り込んできて、足元が水につかりはじめ、恐怖を感じた。必死でアクセルを踏んだらなんとか車が動いてくれたが、三重大学の南にある江戸橋から向こうは車が水につかって動いていない。やむなく橋に車を乗り捨て、そこから約1km離れた保育園まで歩いて向かうことにした。

約1kmの道のりは、普通の状態ならば何の苦労もないが、あふれる水の中を歩くのは大変しんどく、保育園に着いたときにはふらふらになっていた。こどもを背中におぶってさらに1kmほど歩いて家に帰るのは、それまで経験したことがないほど過酷だった。

幸い、我が家はあともう少しというところで浸水をまぬがれた。しかし、汚水の入り込んだ車は鼻が曲がるほどの臭いにおいが1月たっても2月たっても消えず、廃車せざるをえなかった。

私も、こんな経験をするほんの数時間前まで「まさか」こんな目にあうとは思わなかった。

「災害や交通事故は、いつでも、どこでも、誰にでも起こりうる」ものであり、それも「突然に！」ということを経験しておく必要がある。そして、常日頃から、いろいろな災害への対応を考えておかなければならない。

大きな災害を経験した東北の人からいろいろなことを学ばせてもらった。次のような感じのことを言われたものと、私は理解している。

世の中には、地震や津波などの災害や交通事故、病気、犯罪で大切な人や大切な物を突然失った人がたくさんいる。

大切な人、大切な物を本当に大切に、一分、一秒を大切に生きてほしい。

生きているというのはすばらしいことで、ありがたいことだ。

親にいただいた命を大切にしてほしい。

家に帰ったら、家族に会えたことをうれしく思って、元気よく、笑顔で「ただいま」と言ってほしい。

朝、学校に来たら、友達や先生に会えたことをうれしく思って、元気よく、笑顔で「おはよう(ございます)」と言ってほしい。

中高大生の君たちへ

四日市大学総合政策学部 教授 鬼頭 浩文

この事業で毎年お世話になっている宮城県東松島市では、公営住宅への入居や自立再建が完了に近づき、仮設住宅の取り壊しが進んでいます。全員が退去し昨年度には見学だけさせていただいた矢本運動公園仮設住宅は、2016年度は宿泊をさせていただいた集会所を残して解体が進み、西側は綺麗な芝生が植えられた広場になっています。少しずつですが復興に向けて進んでいると言えるでしょう。しかし、災害公営住宅、とくにマンション型の集合住宅では入居者の高齢者比率が高く、コミュニティの助け合いが新しい課題です。今こそ、若い世代が東北に出かけて、高齢者を励ましてほしいです。



四日市大学の総合政策学部の学生たちが立ち上げた四日市東日本大震災支援の会（以下、支援の会）が、2011年のゴールデンウィークに宮城県東松島市で第1回目の災害ボランティア活動をしてから、すでに7年以上がたちました。その間に東北だけで39回、延べ1,572人が活動してきました。東北以外の災害を合わせると、2018年11月の熊本支援が61回目、延べ2,000人を超えるボランティアが被災地で活動してきました。また、2016年1月17日に四日市市に設置された防災に機能を限定した学生消防団では、17名が特別職地方公務員として地域防災に貢献しています。2018年11月1日には定員が22名に増え、新しく1年生が入団します。



定期的な研修・訓練を積み、災害時には避難所運営と災害ボランティアの受け入れに貢献します。三重県とも連携が検討されていて、大学生が災害拠点で物資仕分けなどに携わる仕組みも構築しようとしています。皆さんも、ぜひ次のステージに進み、地域の安全・安心を支える人材になってほしいと願っています。

さて、今年の活動は、どうでしたか。今回の活動は、とても大変な3日間だったと思います。とくに今年は台風が襲来し、3日目に予定していた内容をキャンセルし、3日目に4日目の内容である福島を経由して三重に帰る、という行程になりました。詳しく説明すると何ページにもわたる対応の原稿になってしまいます。長距離バスは、何度も大きな事故を起こし、規制が厳しくなり、運転手に確実に決められた時間を休んでもらうことが必要です。予定では3日目の午前中に、あおいで予定していた炊き出し訓練と流しそうめん大交流会の間に運転手が休むところを、急に予定を変更して3日目に帰ることになりました。そのため、2日目の夜に運転手を早く休ませることが必要になり、スーパー銭湯に行くことができなくなりました。他にも多くの対応が短時間に必要となり、いわゆる「危機管理」の対応力が試される場面になりました。防災を学習する事業で、災害に襲われて右往左往だったわけです。笑えないですね。いや、笑ってしまいますね。



大学生の対応は素晴らしかったです。皆さんが防災講話を聴いている段階から清拭（お風呂に入れない入院中

の患者さんなどの体をふくこと)の準備をし、お風呂に入れない皆さんが可能な限り快適に眠れるように、頑張ってくれました。中高生の皆さんも、最悪の状況によく耐え、翌朝の大きなどら焼きと格闘し、福島でしっかりと語り部さんの話を聴いてくれました。そのどら焼きも、実は入手が大変でした。台風が襲来するとき、停電を心配して、多くの人がスーパーに買い物に出かけます。すぐに電池が売り切れ、パンやおにぎりなども売り切れます。当然のことながら、あの日も食料の棚は空っぽでした。私は、予想はしていましたが、朝食は抜いて出発し、福島の視察が終わって大きいサービスエリアに着いてから食べようと思っていました。しかし、そこは県教委の事業です。朝食は抜くな、入浴はさせろ、3日目に帰ってこい、などと、無理なことを言ってきます。何軒もスーパーをまわれば、何とかなると思いつつ、マイクロバスで行った最初の店で、あのどら焼きと出会ったのです。他の簡単に食べられる食料は、全て売り切れでした。やっぱり、笑ってしまいますね。



今回の三重県教育委員会主催の事業は、中高生が地域防災に貢献できる人材となってくれることを願って企画されました。3日間の君たちは、真剣に災害に向き合い、とても頼もしく思いました。そして、多くの参加者が防災士資格を取得し、東北で感じたことを防災講話などで発信し、地元で頑張っていることも聞きました。支援の会の熊本支援活動に参加してくれた生徒もいます。皆さんの夏の経験が、次のステップに繋がっていること、嬉しく思っています。ぜひ、次の一步を踏み出してください。

前へ!!

<どうしても伝えたい追伸的なこと>

東北では、災害直後の急性期における災害ボランティアと異なり、笑顔を届ける活動が望まれるフェーズになっています。皆さんと出かけた事業も、本当なら流しそうめん大交流会で、多くの被災された方と接し、笑顔を届ける活動になるはずでした。私は、たくさんの被災者の方とお酒を飲み、夜中まで笑って騒ぐこともあります。そんな呑み仲間の一人だった、民謡の唄い手である阿部さんが、2017年8月、災害公営住宅への入居の1週間ほど前に亡くなりました。阿部さんとは何度も呑み、民謡のレコーディングもしました。そのCDは、東松島市の土産物屋で購入できます。

阿部さんとの思い出はたくさんあります。初めて出会ったのは、東松島市の仮設住宅の集会所で四日市の津軽三味線アーティスト KUNI-KEN のミニライブ&お茶会をしたときです。民謡の上手な唄い手がいると仮設住宅の女性たちが言いだし、即興で北海道の民謡を KUNI-KEN の即興伴奏で歌ってもらいました。そのとき、2歳の子どもが楽しそうに踊っていたのを鮮明に覚えています。その時の演奏は、今でも大切な思い出として「録音」したものが残っています。さすが鬼頭 P (プロデューサー)、それが、すごい貴重な録音だったと、後になってわかります。

阿部さんの娘さんは、野蒜小学校の体育館で赤ちゃんがおなかにいる状態で津波にのまれたそうです。阿部さんはその時のことを、後になって笑いながら私たちに話してくれました。「たまたまキャットウォークにいた人たちに救い上げられ、助かったんだ。おなかに赤ちゃんがいたから、プカプカ浮いて助かったんだ」と。翌日ヘリコプターで石



巻赤十字に搬送され、その数日後に無事に赤ちゃんが生まれたそうです。初めて阿部さんと出会ったのが、その赤ちゃんが2歳になった2013年12月22日のKUNI-KENライブのことで、その時に鬼頭Pの癖で録音した即興演奏に、2歳の子の踊ってる足音が入っているんです。すごくないですか？

でも、時は流れていきます。2017年8月18日の朝8時頃、まさに東北にボランティアに出かけようと、大学をクルマで出発しようとしたときでした。阿部さんの番号から携帯に電話が入りました。お、酒の誘いか。しかし、出たのは阿部さんの奥さんでした。その瞬間、私はここ数年でもっとも大きく心臓がバクバクし始めました。その前から阿部さんの癌の症状が改善せず、入院が続いていたからです。奥さんから聞かされたのは、残念ながら阿部さんが亡くなったという、悲しい知らせでした。大学を出て、必死に東北をめざし、通夜の会場に到着しました。穏やかな顔で棺の中に横たわっている阿部さんを見て、私はとても辛かったので、会場をすぐに去ろうとしました。しかし、家族の方や民謡のレコーディングに関わった方たちから、ぜひ一緒に食事をしていってくれと。。私は、もう少しで仮設住宅から出られたはずの阿部さんのことを思いつつ、ここは、やはり呑むべきと考えました。運転を学生にたのみ、ビールを飲み、阿部さんとよく飲んだ日本酒を飲みました。やがて、阿部さんが歌う民謡が流れ始めたときは、涙をこらえることができませんでした。こうして原稿を書いている、涙がこぼれてきます。。。。

で、今夜は、東北のお酒を、と思うのですが、実は現在は自宅のストックが底をついてます。飲み過ぎだべ。12月に出かける東北で、また12本ほど、購入してこようと思います。



なまず博士

平成30年度 学校防災ボランティア事業
活動報告書

編集・発行 三重県教育委員会事務局 教育総務課
〒514-8570
三重県津市広明町13番地
電話 059-224-3301
FAX 059-224-2319